# 平成３０年度郷土歴史講座
## 越谷市制施行６０周年記念
# 「大相模地区西部の歴史」

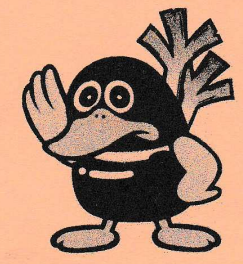
**講師　加藤 幸一　氏**

（ＮＰＯ法人越谷市郷土研究会　顧問）

郷土の歴史について、わかりやすくお話をしていただきます

| | 日　程 | 時　間 | 募　集 | 内　容 | 場　所 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Aコース Bコース | 第1回　5月　9日（水） | 午後2時 ～午後4時 | 80人 定員 | 講座 | 市立図書館 2階 視聴覚ホール | Aコース受講の方は必ず2日間ご参加ください |
| Aコース Bコース | 第2回　5月16日（水） | | | | | |
| Aコース | 第3回　5月23日（水） または 5月30日（水） | 午前9時 ～午後5時 （予定） | 各日 20人 定員 | 現地研修 （バス乗車 ＆徒歩） ＊雨天決行 | 大相模地区 西部の 歴史めぐり | 現地研修は各日同一の内容です 希望日をお書きください |

**申込方法**



越谷特別市民
ガーヤちゃん

◎往復はがきでお申し込みください

○受付期間　4月25日（水）市立図書館必着

○記入事項

①Aコース：講座と現地研修　　3日間コース

　Bコース：講座のみ　　2日間コース

※Aコース（現地研修の希望日をお書きください）　か　Bコースを明記してください

※現地研修のみの申込みはできません

②郵便番号　③住所　④受講希望者氏名（1枚につき1人）　⑤電話番号

※希望者多数の場合は抽選となります

※テキスト代・受講料等は無料です

越谷市制60周年
KOSHIGAYA ANNIVERSARY
60th
60年 はばたけ未来へ みんなの越谷

あて先・問い合わせ先
〒343－0023　越谷市東越谷4－9－1
越谷市立図書館　郷土歴史講座担当
【電話　048－965－2655】

改訂版

# 大聖寺（不動坊）の本尊と境内

加藤幸一

## 大聖寺の秘仏本尊「不動明王像」

秘仏の厨子の前には、通常参拝するお前立（昭和２年奉納、像高約 61 ㎝弱、火炎を含めると 94 ㎝弱、岩座の台石の高さは 30ｃｍ）があり、このお前立の後ろに厨子があるが、その扉を開いて現れる不動尊はこれも厨子の中の秘仏お前立（像高約 52 ㎝程度でなぜか言い伝えの尺七寸とほぼ一致、火炎を含めると 82 ㎝程度、岩座の台石の高さは 7.5ｃｍ）であって、そのお前立の後ろにまた扉があって「尺七寸」（51 ㎝）といわれる秘仏の本尊が安置されている。酉年の平成 29 年は今までは９月１日から大会式の翌日の５日までであったが、第４１世の加藤弘詔氏の特別な計らいにより９月１日より 12 月 28 日迄、その厨子の中のお前立を厨子から出して、奥の扉を開き秘仏をご開帳している。秘仏を納めた厨子の中のお前立のみならず秘仏までご拝見可能となっている。厨子中のお前立の像高（52 ㎝、１尺７寸強）は秘仏の像高（42.5 ㎝）と比べるとやや大きい。秘仏の火炎を含めた高さは 55ｃｍ程度である。秘仏の台石（岩座）の高さは 9.5ｃｍ程度である。（以上の計測は加藤幸一）

秘仏の製作年代は室町末期との説がある。その根拠としては、あくまで推測ではあるが、良弁創建説が伝える奈良時代のはずがないとして、その後の天文年間（1532～1554）の家鳴不動伝説※の頃の製作ととらえたからではないだろうか。傾聴に値する室町末期造立説である。

※大相模不動院を江戸時代に「家鳴不動」とも呼ばれたいわれは次の通りである。

天文年間（１５３２～５５）のこと。ある盗賊が不動坊に入り、本尊の不動明王像を盗んで江戸の某の家（ある家）に持ち帰ったが、その夜、本尊を安置したその宿所は一晩中家屋が鳴動（音を立てて揺れ動くこと）したので、驚き慌てた盗賊は引き返してもとの場所にその本尊を戻したという。（以上、「越谷市の史蹟と傳説」138 頁参照）その後、変事（よくない出来事）があれば鳴動することから江戸の目黒・目白・目赤不動、総州（今日の千葉県あたり）の成田不動とともによく知られ、大相模の「家鳴不動」といわれていた。そしてこの大相模の不動は成田・加須とともに関東の三大不動としていよいよ盛んになったという。

「武州不動明王瑞像記」によると、この頃に不動坊は岩槻城主太田資正によって尊崇されるほどであったことから、これ以前に存在していたことは疑いの余地がない。本尊の不動明王像も同様に考えられ、明治 28 年７月（本間清利説、一説には明治 26 年６月 16 日晩）の本堂などの焼失の際にも無事に持ち出され、今日まで長きにわたり現存しているのである。

この良弁による奈良時代の天平勝宝二年（７５０）創建説はよく知られるが、あまり知られていないもう一つの説が「瑞像記」に記述されている。それは不動明王を尊崇していた翁の平安時代の延喜年間（901～922）創建説である。これにより本尊の不動明王像の造立については、実は室町末期よりもっと古く、密教とともに不動明王像が広がっていく密教全盛の平安期、つまり延喜年間との可能性が大きいのではないだろうか。都から離れた片田舎の翁が延喜年間に大山不動で知られる大山寺（開山は天平勝宝７年）の影響を受けて早くも不動明王信仰を取り入れ、「不動坊」（現・大聖寺）が建立され、良弁作といわれる現在の秘仏「尺七寸」の不動明王像が安置されたのであろう。つまり翁創建説によると尺７寸の秘仏は延喜年間の造立と強く推定することができる。

なお「瑞像記」には、寛文年間に紛失したという江戸時代以前の古誌に、この良弁創建の言い伝えが書かれていたと記述されている。ここには不動明王像を得るまでのいきさつが述べられており、その内容は今でもよく知られている。今後も、良弁創建の寺院伝説として後世に大切に残していきたい。

次に「武州不動明王瑞像記」の中で述べられている良弁創建説と翁創建説の二説を下記に紹介する。

### 《良弁創建説》

昔奈良にいた、良弁僧正(そうじょう)は、神のようにあらゆる方向を教化し、大きな利益を開き導き、方(まさ)に東国に来て、相模国大山(おおやま)に（寺を建築する地を）卜（ぼく・占って選ぶ）して築き、心清らかに身を修め一生懸命に励んでいた。その時、不動明王が形を現し、良弁を慰め諭した。良弁は仰ぎ見て、非凡な考え

が生まれ、自ら其の顔かたちを模倣して木に刻んだ［長さ一尺七寸（五十一．五㌢）］。おつきの人に負わせ、(行く)所には必ず随行させた。此の村に来られた処、俄(にわか)に盤石（ばんじゃく・大きな岩）のように重くなり、百人千人と雖（いえど）も之（これ）を持ち挙げることができない。そこで有縁（うえん）の地で、之（これ）を留めるべき験（しるし）とわかった。将に此（ここ）に妥（やすら）かに奉ろうとし、誓って曰く「尊意ならば、前のように軽くなりますように。」と。試みに再び持ち挙げてみると、おおとりの羽毛のようにひらひらとしていた。ついに堂宇を創建して、安置し供養した。爾（そ）れ以来、郷は大相模と称し、山は真大山と号し、寺は不動坊と名づけたと言う。(「武州大相模不動明王瑞像記」より)

**《翁創建説》**

相模国大山(おおやま)の尊像と、同木で刻してあり、(木の）根本を用いている。然るに延喜年間、一人の変わった翁がおり、庵(いおり)を結び（この）郷の古荒川(ふるあらかわ・今の元荒川[もとあらかわ]）の岸に住んでいた。 身体は清流に沐浴し、外では潔斎(けっさい・心身の清め)を以て、心に仏乗（一切衆生をことごとく成仏させる教え）を欣（よろこ）び、内では精進（しょうじん）を以て、常に（不動）明王に帰依し、復(ま)た余念がなかった。日照り・長雨やはやり病（など)、凡そ難あれば、すぐに日夜郷里を巡行しては、明王真言（しんごん）を唱え、救済を以て、其の効験（こうげん）が無いということはなかった。地元の人々は「生き不動」と呼んだ。翁は相模国の大山へ詣でること、年に十(回)を以て数えた。その願いは霊験あらたかな像を得るという所にあった。ある朝将（まさ）に彼（か）の山に赴かんとし、途中で平阜（へいふ・丘の上の平地）を歴（へ）て［即ち今のお旅どころ］、ある苦行者に遇（あ）う［世に言う山臥（やまぶし)］。笈（きゅう・行脚僧や山伏などが、旅の際、物を入れて背負って持ち運ぶ、竹で編んだ箱。おい。）を負い石の上に座り、あごひげ・髪の毛は垂れ下がり、(その）威厳は尋常でなかった。翁、初めて会って、すぐ互いに旧友のようになった。行者曰く「あなたは何を求めて、幾度も大山に行くのか。」と。翁は其の志(像の取得)を以て告げた。行者は髀（もも）を搏(う)って、溜め息して感嘆して曰く「遭遇したのは奇縁かな、我は瑞像を持っていて、秘蔵すること久しく、たとえ値段の付けられぬ貨（たから）だと言えども、之（これ）と交換したくないのだが、今あなたが懇ろに祈願しているのに感じた。」と。則ち起立して笈を開き、不動明王像を出して、与えた。厳かで極めてものすごい威怒相は、人間わざではなかった。行者は眉を張り像を指し、正座して翁に言って曰く「あなたは之（これ・この像）を知っているか、嘗（かつ）て良弁法師が、(不動）明王の真の身体を感得してご覧になり、手ずから（自分の手で）之（これ）にのっとって作った物（者）こそ、此の像です。」と。置くとすぐ立ち去る。翁は怪しみながら行くところについて行った。北へ百歩数えたところで、行者顧みて曰く「此の地は不動明王の霊験あらたかな寺（にふさわしい)、須らく（ここに）安置せよ。」と。そこで忽然と姿を消す。翁は大いに驚き歓（よろこ）び躍（はね）て、「おそらく是（これ）は大山の大聖（だいしょう・み仏）が私に授ける所であろう。」と思った。そこで爾（そ）の処で茅を切り払って像を安置した。翁は亦（また）多年にわたって苦行し、其の死去した所はわからないと言う。(「武州大相模不動明王瑞像記」より)



59. 大聖寺木造不動明王立像

秘仏本尊不動明王像（越谷市仏像調査報告書」より）




右図は、仁王門創建二十六年後の文政十三年頃の様子（新編武蔵風土記稿」）である。当時の二天門と本堂（不動堂）との間がかなり離れている。江戸時代の本堂は現在の本堂よりかなり後ろにあった事がわかる。

## 翁伝説（大相模不動明王瑞像記）と元荒川

翁伝説によると、平安時代の延喜年間（901～922）のこと、古荒川の岸辺に住み、清流に沐浴して不動明王を熱心に信仰していた翁（地元では「生き不動」と呼ばれた）がいた。相模国の大山にも何度も参詣している。

ある日、大山に向かう途中で山伏に出あう。良弁作の不動明王像を授かる。出会った地点から北へ百歩数えた地にお堂を建て、不動明王像を安置する。これが不動坊、後の大聖寺の始まりである。

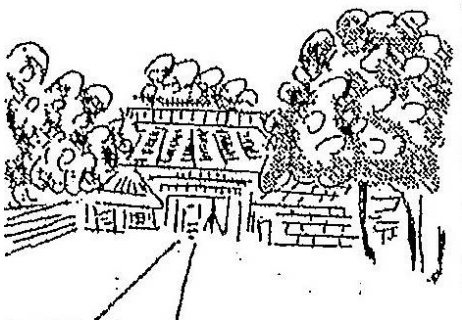
《元荒川の考察》

歴史的には、古代・中世の元荒川（古荒川）は下総と武蔵の国境を流れる現在の隅田川（上流は利根川と呼ぶ）の大河であった。江戸時代が近づくころになると、上流の利根川が権現堂川や庄内川方面に流れるようになったため、荒川となり、さらに江戸時代の寛永６年（1629）には熊谷の久下方面で流れが入間川方面に付け替えられると元荒川（古荒川）と称されるようになる。

享保１４年（１７２９）に書かれた「大相模不動明王瑞像記」には古代中世の隅田川ではなく、その後の、いつの頃（中世末期から近世初期にかけて？）かに呼ばれ始めた古荒川（現在の元荒川）の名称を使っている。

なお、秦野秀明氏の推測する小林に見られたと思われる「小林古川」（仮称）や高崎力氏が推測する古川（大成町一丁目）についての解明は、今後の課題となる。

# 大聖寺境内の変遷



１．二天門の火災（「越谷市の史蹟と傳説」140 頁下段の３．仁天門より抜粋）

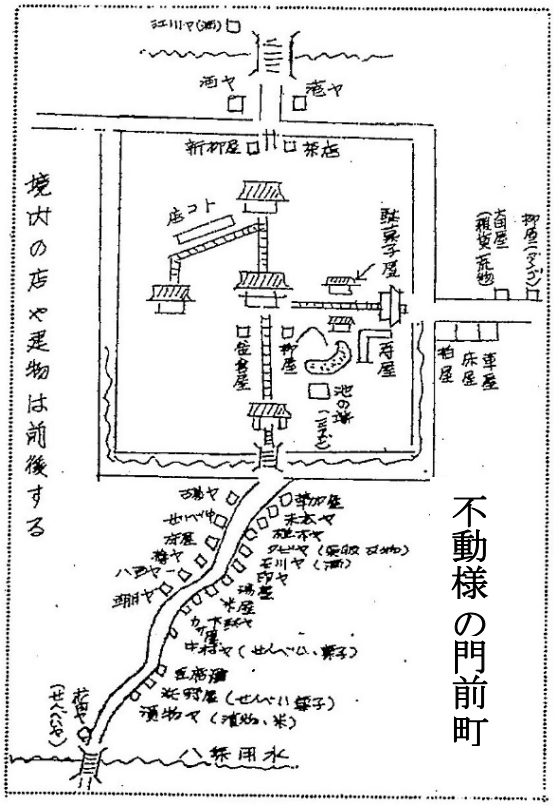
享保四年頃建立　屋根は茅葺で両側に持国、毘沙門の二天像を安置した。階上に十六羅漢あり　口廊（※１）をめぐらす　明治二十二年十月九日、町内（門前町を称す※２）の山崎湯屋（銭湯）より火災を生じ近所十七軒を焼きつくし更に飛び火によって二天門の茅屋根に火が移り全焼した　この時佛像の眼が宝石であるといわれていたので太助坊（俗に乞食坊主といわれる人々が食客として多数宿泊していた中の一人）は火中に飛びこんだが遂に焼死してしまった。

なお、昭和４年にも煎餅屋から出火し、七軒を焼失した。

※１「回廊」の誤りか

※２　右下図参照（同 143 頁より抜粋）

秋山幸一氏によると父（末広屋）からの話として「門前町に構えていた商家が出火の責任をとり門前町から離れた所に移転させられた」という。




「越谷市の史蹟と傳説」143 頁より抜粋

２．明治２８年の大聖寺火災（同 139 頁上段末尾と 140 頁上段より抜粋）

明治二十六年六月（※３）十六日晩の火災（原因については二説ないし三説ある）でその殆んどを焼滅してしまった当時の全貌を見よう“戦災前の浅草観音様に勝るとも劣らない規模”　西新井大師をして“せめて大相模不動様なみに参詣客があれば”となげかわし、更に驚くべし火災後の灰を買った海宝瓶太郎氏（浅草の金属商）をして“元荒川で灰を流して集めた金物で“二万円”をもうけたと豪語させた七堂伽藍はどんなであったろうか。

※３　大聖寺の火災は、境内にある「御座の松の碑」によると明治２８年７月が正しい。明治２６年６月は誤りである。

３．本堂（「越谷市の史蹟と傳説」140 頁下段と 141 頁上段より抜粋）

本尊は良弁作といわれる尺七寸（一尺七寸）の白木像で秘仏として人に示さなかった。この前に知証（※４）の刻んだ一尺三寸の立像（※５）を安置した。明治二十六年六月十六日（※３）折からの雨風に本堂回廊下附近より発火し二日三晩焼元続けた結果さしもの大建築も土台石（※６）のみを残して灰となった。火災の原因について二、三の説あるも何れも確定的でない。大木で本堂は焼け　後　半分のいたましい姿で生きていたことは今では楠（※７）のみとなってしまった。

さてこの火災で疑問となるのは本尊のことであるが、出火と同時に或る人が厨子を開けると小さい仏像一体しかなかったので、これが本尊であろうと云われた。しかしこの時御本尊は他にあったので難を逃れたのは不幸中の幸であった。

※４　知証とは、天台宗寺門派の祖、智証大師円珍を指すと思われる。

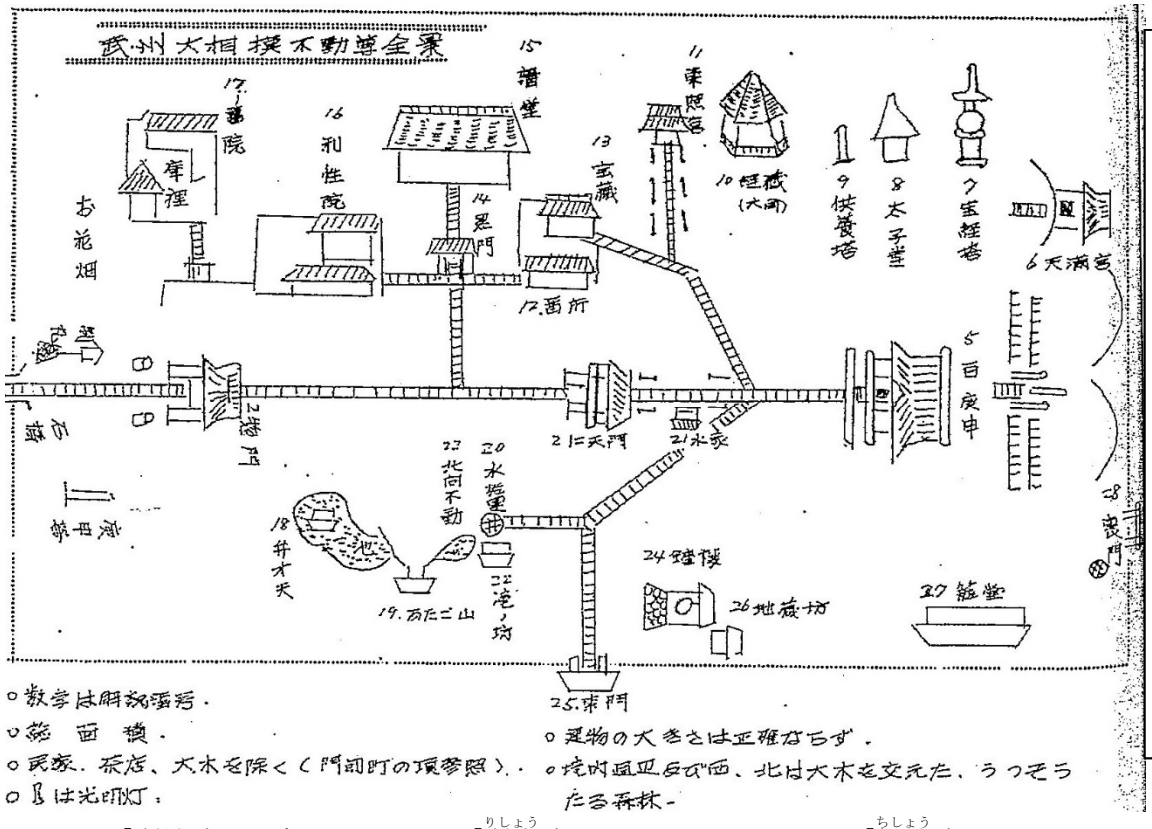
※５　通常拝観できる前立のすぐ後ろの厨子の中にある秘仏お前立（１尺７寸）を指すのであろうか。しかしながら新編武蔵風土記稿の西方村の中で記述されている智証の一尺三寸の長さの前立とは一致しない。尺七寸と伝わる秘仏の長さと一致する。なお秘仏の像高は４２．５㎝（１尺４寸）で智証作の前立の一尺三寸に近い。一般には前立より本尊の方が立派であるので、もしかしたら秘仏本尊と秘仏前立が入れ替わった可能性はないであろうか。現在の秘仏と現在の秘仏の前立との関係は今後の課題である。

※６　現在、本堂の裏の道路沿いにあり。ここにかつて百庚申の塚があった。現在百庚申は東門参道に移転。

※７　楠とは、樟、クスノキのことである。ここでは現在の樹齢五百年といわれる天然記念物の「タブノキ」をさすと思われる。かつては地元ではクスノキと思われていた。明治２８年の火災に遭遇しながらも生き残る。落雷にもあって上の方の部分が折れたという。幹に空洞がみられる。

４．大聖寺の明治の焼失以前の境内の様子

**明治２２年の二天門焼失、明治２８年の惣門を除く全焼以前の大聖寺境内の様子は以下の通りである。**



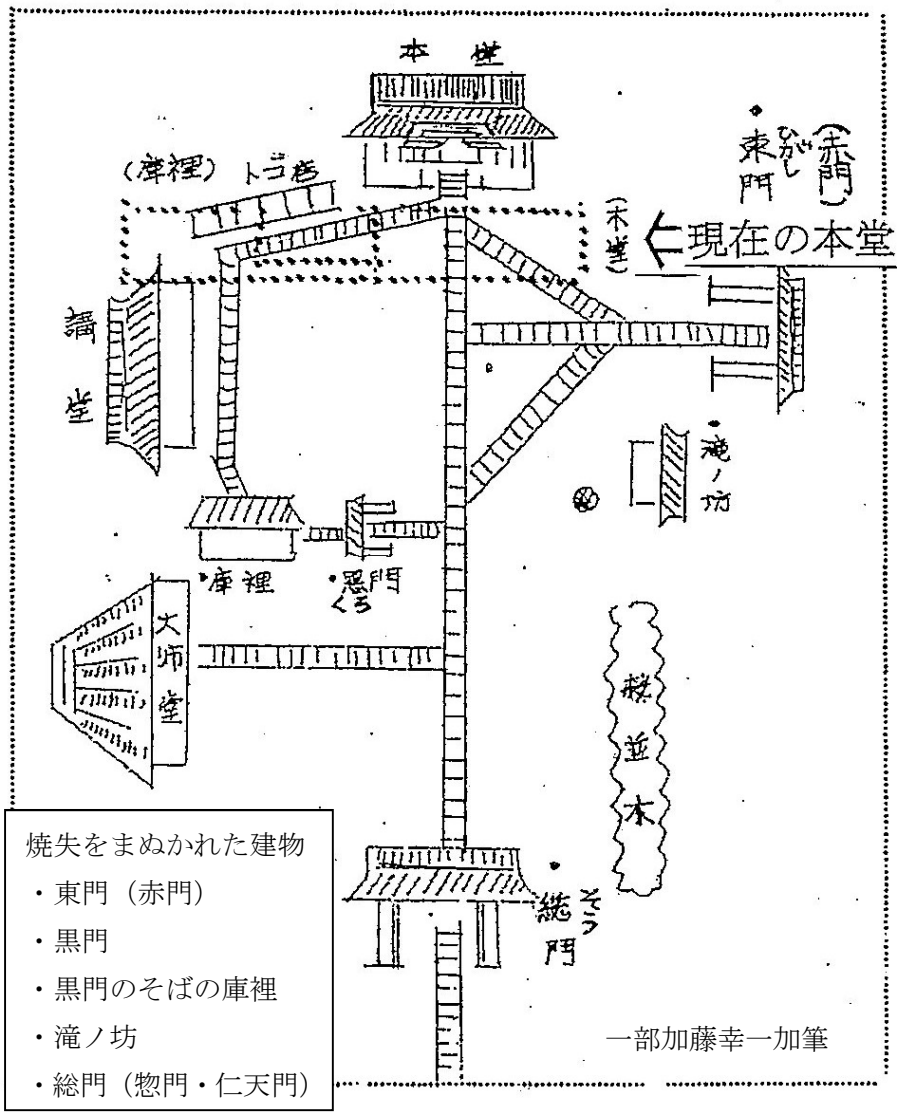

左図は惣門が創建された文化元年　1804）から二天門の焼失の明治２２年　1889）までの間に描かれたもの。

１６は「利性院」と書かれている。「利生（りしょう）院」のことか。それとも「知性（ちしょう）院」の誤りか。

５．焼失後の大聖寺の境内の様子（「越谷市の史蹟と傳説」142 頁下段より抜粋）

焼失により急造バラックを大正十二年九月一日迄は次の図のようであった（次の頁参照）。

※なお、図の脇に書かれたコメントには、焼失後に建てられた「本堂はトタン葺、講堂は末寺の安養院を移転（加筆：大正６年か)、大師堂は四条の妙音院を購入」と述べられている。




左図は　越谷市の史蹟と傳説」142 頁より抜粋

・印は焼失をまぬかれた建物、但し庫裡は総門西側にあったもの。
本堂はトタン葺、講堂は末寺の安養院を移転、大師堂は四条の妙音院を購入、……線は現在の建物、
・トコ店とは人が住まない出店。

６．関東大震災後

（大正十二年九月一日の）大震災で本堂は倒壊、大師堂又くずれ、講堂はガタついたものの大樽に支えられて倒壊はまぬかれた。この震災で再建寄附は中止となり急遽仮本堂を建てることになり、大師堂と講堂の材料で本堂と庫裡を二万八千円で作り今日に至っている。　　※以上「越谷市の史蹟と傳説」142 頁下段より抜粋

※本堂の建設には、本来の四条の妙音院（大師堂）の材料と本来の安養院（講堂）の材料を利用したのである。

※本堂は大師堂と講堂の材料で４０人ほどの大工さんの手で、大正１４年に１年がかりで完成した。特に地震に耐えられるように気を配って作られている。その時の住職は第３８世の慶進（正式に住職となったのは大正１３年）である。

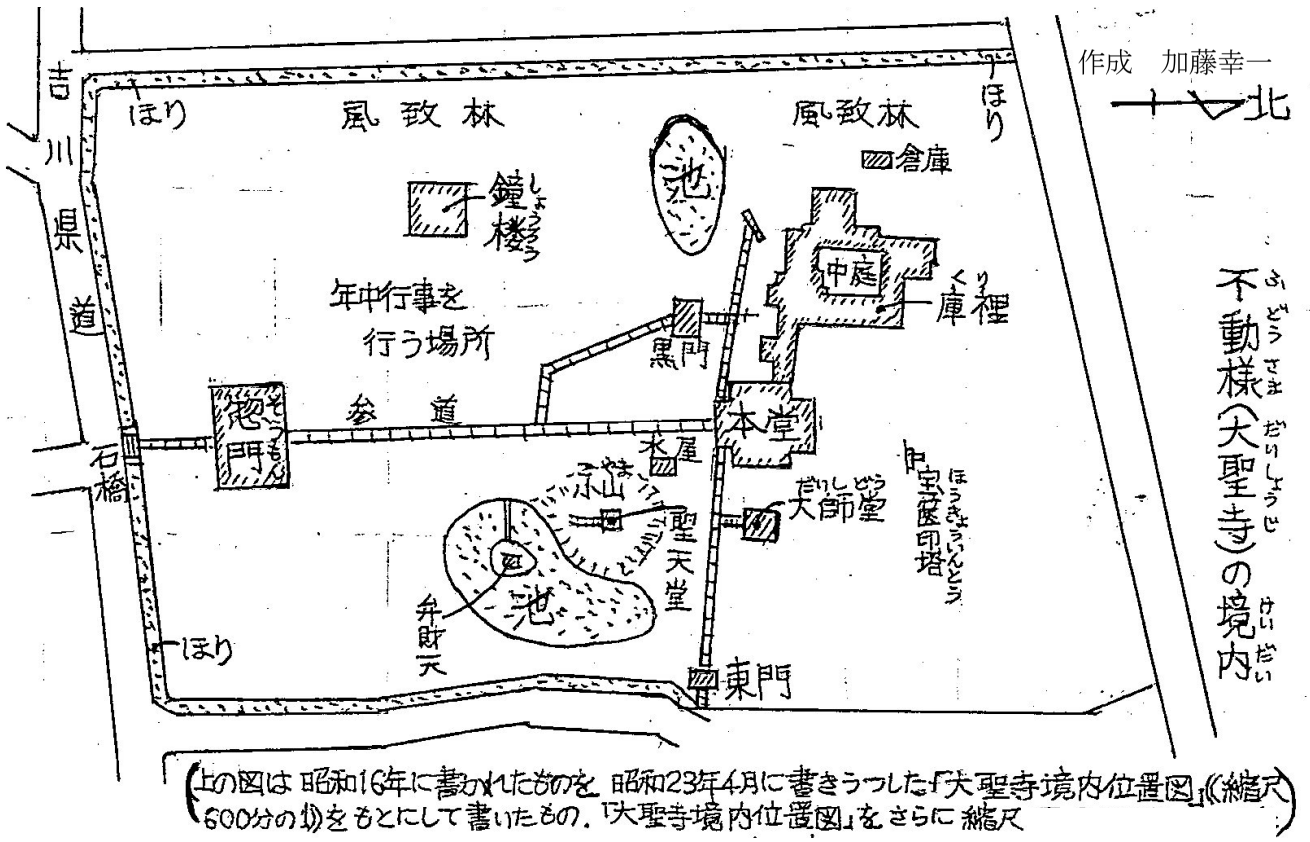
※現在の本堂は、上図により焼失後に建てられた本堂の前の位置に再建され、あくまでも仮本堂ということになる。なお「宮殿厨子（くうでんずし）」（現在の秘仏本尊を安置した厨子）は、大正６年（1917）３月に「前住職真島戒信」、「現住職清水祐暢」の時に奉納されている。仏師は野田町の沼野仁之助である。

※明治の焼失前の本堂の位置は、前の頁に掲載している「大相模不動尊全景」の境内図から、焼失後に建てられた上図の本堂のさらに後ろにあったと推測できる。

「史蹟と伝説」138 頁下段 13 行目～16 行目に以下の記述があり参考までに抜粋する。文中〈大聖寺の〉は加筆。

「即ち〈大聖寺の〉末寺のことで、次の五寺が近年まであった。安養院（大正六年境内に移転し現在は庫裡となる)、福寿院（明治四十三年合併)、智将院、利将院、東光院（廃寺)」

７．昭和１６年当時の大聖寺の境内の様子




日枝神社

所在地　越谷市相模町六丁目

日枝神社の勧請年は不詳であるが、元荒川をひかえた奥州街道に面した古社の一つである。もとは山王社と称され、東光院、利生院、神王院、安楽寺、薬王寺、観音寺の六寺院を配下におさめていた大きな社であった。その後江戸時代に四寺が大相模大聖寺の塔頭に移され、一寺が廃寺となったが、山王社は西方村の鎮守に位置づけられた。

明治の初年山王社は日枝神社と改称、明治四十年同村の八幡神社、稲荷神社、愛宕社、天神社などを合祀している。現在は大山咋命、素戔嗚尊、菅原道真、大己貴命など十五柱を祭神として祀っている。

境内には古い石塔はみられないものの、神社にほど近いおしゃもじ橋と称された祠堂には、嘉暦三年（一三二八）在銘のものと、元弘三年（一三三三）在銘の弥陀一尊板碑が神体として祀られている。

昭和六十一年三月

埼玉県

上記の紹介文の文中、「おしゃもじ橋」は「おしゃもじ様」の誤りである。おしゃもじ様は、相模町６－４５２の金子宅（他に移転）裏の土手道沿いにあった。願いがかなうと、おしゃもじを奉納した信仰がかつてあったという。今はその名残は全くない。

上記の文中の「安楽寺」「薬王寺」は「新編武蔵風土記稿」の西方村の項に基づいた記述であるが、東方村の項の中では「安楽院」「薬王院」と違って記載されている。「越谷市史　続資料編（一）」一四七頁の古絵図によって「安楽院」との名称が正しいことがわかる。また越谷市立図書館所蔵の絵図２５の２「越谷市内の大成町周辺の絵図その２」でも「安楽院」「薬王寺」と記載されていて「安楽院」「薬王寺」の正しさが裏付けされるようだ。

# 大聖寺の惣門（仁王門、山門）の創建年代

## ――正徳５年創建とするのは誤り、文化元年創建が正しい――

大聖寺の山門に関しての記念碑「惣門修繕碑」が惣門のそばに建っている。「惣門修繕碑」（惣門とは、外構えの大きな正門を意味し、現在の仁王門に当たり、山門とも呼ばれている）は、明治２１年（１８８８）４月に建立されたもので、これによると惣門は文化元年（１８０４）の創建とされる。これにより、今まで言われてきた正徳５年（１７１５）は誤りであるとわかった。惣門修繕碑の全文は以下の通りである。

惣門修繕碑

夫　積善徳行の基礎朽る事あらんや　爰に当寺廿三世の住　木食戒円師　二王門なきは法に非と発願し　十方の信者に助成を得て　文化元年十二月　始て瓦葺の大惣門建立し　後ち嘉永元歳に至り　経る事四拾五年にして大破す　時に三十世の信剛比丘　広く有志を受　再興し　屋根を銅版に葺換す　永世不朽と思の外明治十三年に及て　僅に三拾余年にして損破す　修補成り難を　西方　東方見田方　三村の信徒同盟五十余名　一致相議し　懇篤世話方に尽力す　八方有信の浄財を納得し　明治十七年に至り　修繕銅版葺落成す　宜なる哉　是即ち本尊明王の威徳と衆庶の功徳と利益感応して成就する所謂なり　因て　衆有志に報るに　五穀成満　家内安全　子孫繁昌の祈念怠る事なし　其功勲を碣に勒して　後覧の為に備んと　爾云

明治二十一年四月　　当寺三十二世　住　真島戒信　謹　誌

「二王門なきは法に非と発願し　十方の信者に助成を得て　文化元年十二月　始て瓦葺の大惣門建立」、つまり、「仁王門がないのはだめだとして、文化元年（１８０４）十二月、初めて瓦葺きの大惣門（仁王門）を建立する。」としている。

その後の経過についても次のように記されている。

「嘉永元年（１８４８）に大破する。そこで再建し屋根を銅板葺きにする。明治１３年（１８８０）に損破する。修理しにくいのを修理し、明治１７年（１８８４）に屋根が銅板葺きの惣門（仁王門）が完成する。」

つまり、「仁王門である惣門は、文化元年（１８０４）に創建され、その後に大破したり、破損したりして２度にわたって修繕を行った。」とのことである。

では、「正徳５年」という年代はどこから出てきたのか。次に触れたい。

享保１４年（１７２９）に作られた「大相模不動明王瑞像記」によると、現在の山門と本堂との間に存在した二天門は、楼上に釈迦三尊像・十六羅漢像、下に持国天・多聞天の二天像を安置していて、享保１４年の１４年

前である正徳５年（１７１５）に創建されたという。二天門が創建されたとされる正徳５年に、同じ大事業である仁王門も同時に創建されたとは考えにくい。しかもこの瑞像記には「仁王門」（惣門、山門）についてはどこにも触れられていない。享保１４年の時点では、仁王門はまだ存在していなかったのである。つまり二天門の創建した正徳 5 年の年代を、仁王門の創建年代として誤って解釈したと思われる。

越谷市教育委員会では、現在「山門は正徳五年（一七一五）に建立した茅葺き屋根であったが文化元年（一八〇四）瓦葺きとなり、その後破損、明治十七年修繕して銅板葺きが完成し今日に至っている。」つまり「正徳 5 年に茅葺屋根の惣門が建立され、文化元年に瓦葺屋根の惣門が再建された」として文化元年再建説を述べている。

「山門は聖徳５年に建立した茅葺屋根」との記述には納得できない。しかしながら惣門のあるこの地点は大聖寺境内の正面入口にあたることから、文化元年に立派な瓦葺屋根の仁王門が建立される以前にも単なる山門（仁王像は安置されていない）が既にあったと強く推認できる。その点で文化元年再建説はありうる。

「大相模不動明王瑞像記」の「二天門」に該当する部分を取りだして以下に紹介する。

「大相模不動明王瑞像記」

原文

先於是、正徳乙未年、元新建楼門、規製施巧、締搆尽意、楼上安釈迦三尊十六羅漢像、門則置持国多聞二天像、以為群生帰入之標、

訳文

是（これ）より前に、正徳 5 年の乙未年、隆元は楼門（二階作りの門）を新たに建て、様式は巧を施し、こしらえは意を尽くした。楼上には釈迦三尊像・十六羅漢像を安置し、門の側（かたわ）らには、持国・多聞の二天像を置き、多くの人々の帰依の目印とした。

なお正徳５年に創建された二天門は、明治２２年（１８８９）に門前町の風呂屋の失火がきっかけで飛び火して焼失し現在はない。二天門のみの焼失で済んだのである。二天門の焼失から６年後の明治２８年（１８９５）に今度は本堂などが焼失する大火災にあうが、この仁王門（惣門、山門）のみが助かり、その後の震災・戦災にも免れ、今日に至るまで無事に残っている。文化元年（１８０４）に創建された仁王門は 2 度の火災を免れてきたのである。

大聖寺の惣門の創建年代の正徳 5 年の誤りに関することは、私が問題提起した「川のあるまち」第９号（H3 年 3 月刊）「正徳５年造立とされる大聖寺山門について」をご覧願いたい。

平成３０年２月２２日　　加藤幸一

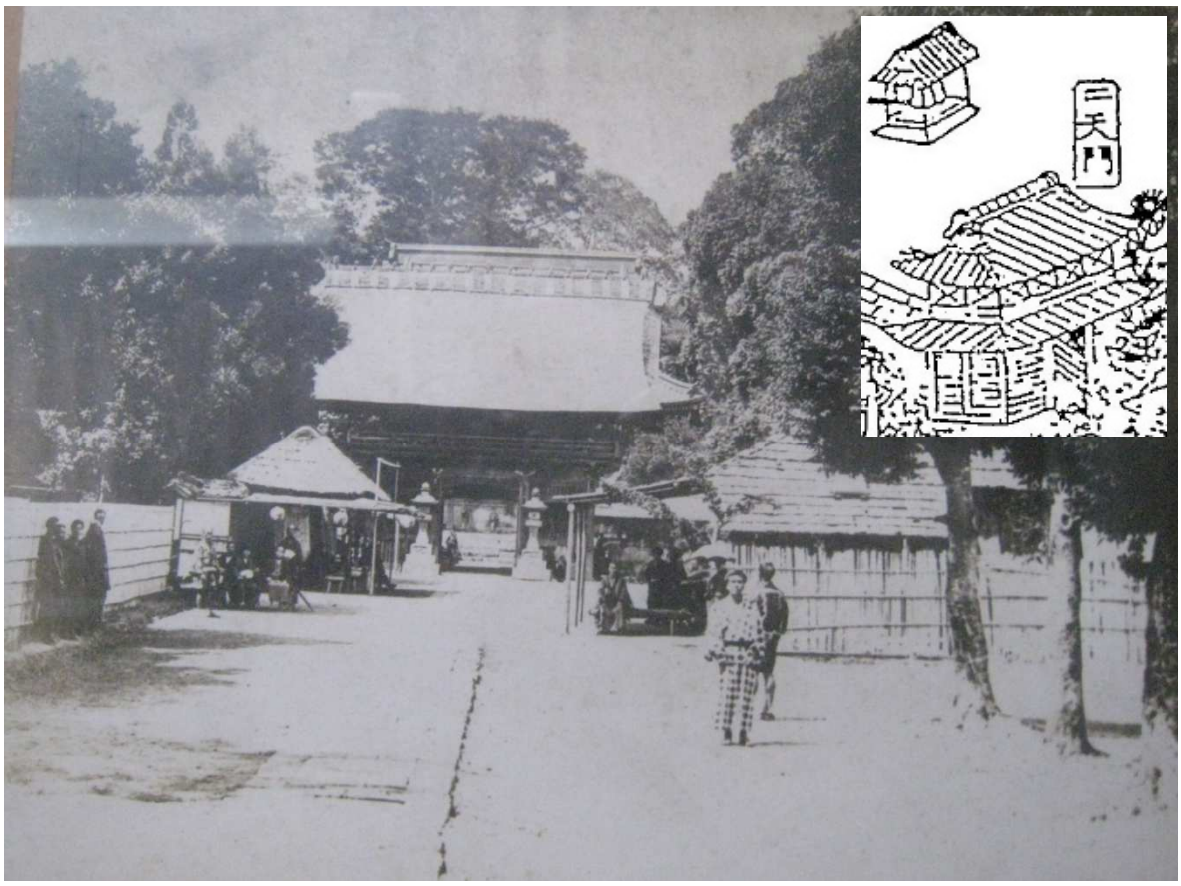
# 今はなき大聖寺の「二天門」

加藤幸一

１．二天門の焼失

正徳５年（1715）に創建の二天門は明治２２年（1889）の門前町の山崎湯屋出火の時の飛び火により茅葺に移り焼失した。これは焼失前の貴重な複製写真（大正５年１１月）である。

二天門には持国天と多聞天（毘沙門天）が祀られていた楼門形式の門である。この後ろに現在の惣門よりもはるかに背の高い立派な本堂の屋根の一部が見られる。本堂というものは二天門や惣門よりも高いことは当然である。この本堂は現在の本堂の位置よりさらに後方にあり、現在の本堂の裏の百庚申のあった塚跡の手前（南側）にあった。この百庚申塚跡に本堂の礎石が放置されている。その礎石をみると、いかに大きかったかがわかる。この江戸時代の本堂は明治２８年に焼失している。




大聖寺宝物殿保管の「真大山仁天門原景　大正五年十一月復寫」より
二天門の図は「新編武蔵風土記稿」より抜粋し、この写真の上に加えた

２．二天門の位置

上記の写真の中に二天門の前に置かれた石灯篭が一対見られる。屋号が「馬喰長（ばくろちょう）」と呼ばれた石塚家が率いる馬口労（博労）連中が寛政元年（１７８９）３月に造立したものである。この石灯篭は、次の頁の写真に示すように現在東門に通じる道に移転されている。この石灯篭が置かれた位置は次の頁の写真に示す現住職である加藤弘詔氏が立っておられる所である。現在の石灯籠よりも本堂側にあったことがわかる。今は無き二天門は、この石灯籠跡よりも本堂側にあったことになる。

かつての二天門の位置は、以下の通り。




一対の石灯篭は現在、東門の参道の北側に移転

作成にあたっては「2006 年 12 月のゼンリン住宅地図」を使用





馬と猿（向かって右上）



２頭の馬






平成２９年１２月撮影

※向かって左の写真には現在の石灯篭がみられる。奥には惣門が写っている。かつての石灯籠はこれよりも本堂側にあったことがわかる。

# 大相模不動尊の門前町




門前町の賑い（寛保元年・文政八年・十二年・付図）

# 大聖寺の九月四日の梨市と家康の戦勝祈願

加藤幸一

毎年梨市が行われる日に実施される大聖寺の「大会式」（重きを置いた法会）は、家康が大聖寺に立ち寄って戦勝祈願をした日と深く関係していると思われる。

なぜ「大会式」という最重要視された大祭を九月四日にしたのであろうか。必ず何か重大な理由があったはずである。おそらくその理由は、大聖寺と縁が深かった家康がここに来た日は「八月四日」との言い伝えがあったからであろう。その後、新暦が使われるようになってから、旧暦の秋八月四日の大会式を一ケ月遅れの新暦の秋九月四日にしたと思われる。つまり家康が大聖寺に立ち寄って戦勝祈願した日は、江戸時代以来、旧暦の秋八月四日とされ、この日を記念して行われたのが「大会式」であったと思うのである。

「関ヶ原の戦い」があったのは、慶長五年（一九〇〇）の九月十五日のことである。当時の暦では秋の終わり頃である。

会津の上杉討伐のため野州小山にまで出陣していた家康は、七月二十四日に江戸からの情報として「石田三成が近江で挙兵した」との便りを聞く。そこで家康は八月四日の早朝に小山を発った。そして翌五日に江戸に到着したと思われる。大聖寺所蔵の「武州大相模不動明王瑞像記」によると、家康の兵は小山から江戸に引き返す途中で急にひどい大雨に会い、大聖寺（大相模不動尊）に立ち寄ったとされている。その立ち寄った日は、秋八月四日と推定できる。そしてそこで石田三成を成敗するための戦勝祈願を行う。

家康は自分の刀を大聖寺に奉納した。住職の定伝はその刀を護摩檀に立て、護摩を炊いて本尊の不動明王の前で戦勝祈願のための呪文を唱えた。そして「とても鋭い刀剣よ、魔軍を打ち破れ」などと訴えた。するとその刀が西に倒れ、武器が触れ合う音がして、鎧を着けた武士が競い走り去るようであった。戦闘の様子と石田方の賊の退散の様子を表している。以上が「武州大相模不動明王瑞像記」に書かれた内容である。西は西軍の石田方をさす。家康方は東軍である。その後、おそらく大聖寺で体を休め、一泊したことになるのであろう。こうして家康は、前々から家康とつながりのある住職定伝の住む大聖寺に立ち寄り、戦勝祈願をしたのである。家康にとっての八月四日は戦勝祈願で石田方を倒すとのお告げが出た記念すべき日であったといえる。

さて大聖寺では毎年九月四日（江戸時代は秋の八月四日）に護摩祈祷などを行う大会式が催され、一方縁日もたち、かつては多くの露店で大変賑わったのである。この露店がたつ市を「梨市」と呼んだ。境内の外の通り（吉川県道）には、千葉県などから来た梨栽培農家の人たちによって梨の市が立ち並んでいた。昭和二十年代後半は瓦曽根溜井の稲荷神社あたりまで、昭和三十年代初め頃は瓦曽根溜井の手前まで並んでいたという。境内には地元の露天商がひしめきあい、秋の虫なども売られ、見世物小屋も建てられて大いに賑わいをみせた。翌日の五日には、地元若者たちによって相撲大会を催す習わしがあった。相撲は戦後になっても何年か続けられたが、いつしかすたれ今は催されていない。

# 終戦までの大聖寺の梨市】

以下は、相模町二丁目二二三八の 池田仁 氏からの聞き取りをまとめたものである。

毎年行われる九月四日の「梨市」は、近郷近在はもとより、遠方からの老若男女の参詣人、行楽客で終日にぎわった。

二、三日前から見世物、サーカスなどの舞台が作られ、チンドン屋で派手に巡回宣伝された。

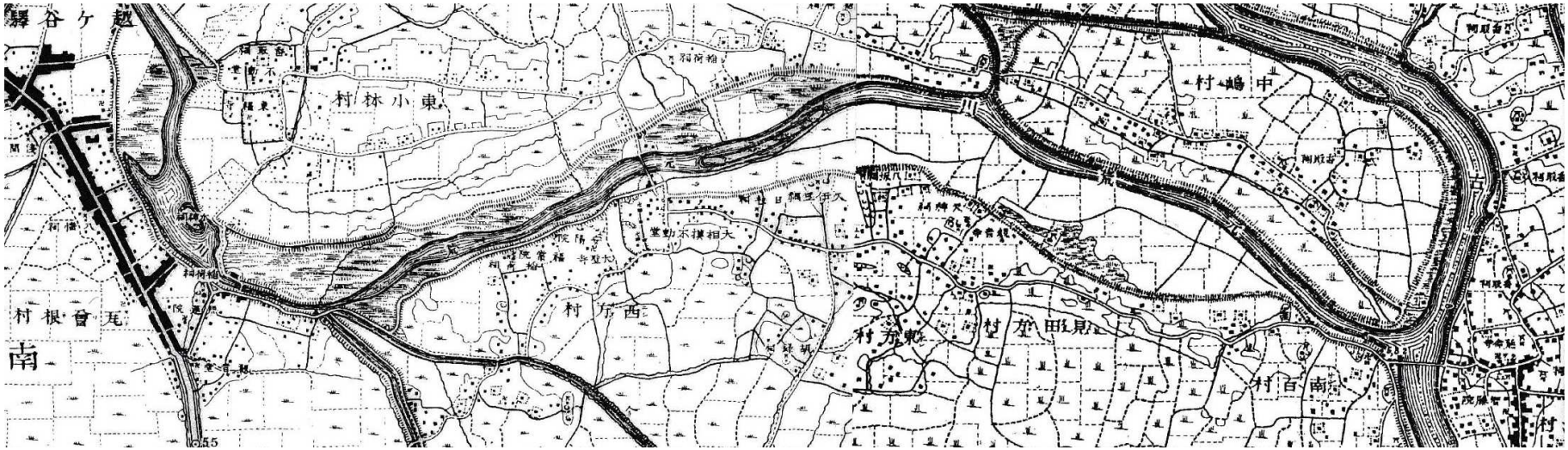
本堂裏の元荒川には舟橋が架けられ、表や裏門通り近くに自転車預かり所が設営され、東武線浅草駅からの臨時電車、越ヶ谷駅前からの臨時バスダイヤが編成され準備万端整う。

当日、市川・流山産の梨、その梨商人が境内、県道沿い、元荒川土手沿いの空き地に早朝より出店、その数百店は下らない。

九時近くから参詣人が、わに口を響かせ、境内を埋め尽くす。興行者の笛・太鼓の音、各店の客への呼び込み、益々活況を呈する。参詣人の大多数は竹かごか、網に梨を買い求めて帰る。

# 大相模郷より越ヶ谷町の中町までの往古奥州道

明治１３年測量の迅速測図




平成 20 年度版　こしがや案内図



# 『武州大相模不動明王瑞像記』

越谷市郷土研究会理事　加藤幸一

『武州大相模（おおさがみ）不動明王瑞像記（ずいぞうき）』は越谷市内の大相模の西方（にしかた）にある真大山（しんたいさん）大聖寺（だいしょうじ）に現存している巻物の縁起状で、当時の住職英山（えいざん）の依頼によって享保十四年（一七二九）八月に江戸の宝林山霊雲寺第三世の慧曦（えぎ）が文を作り、光天が書いたものである。約一五〇〇字の漢字よりなる漢文で著されている。ここには次にあげる内容がみられる。

①寺誌（じし）の紛失　　寛文年間（一六六一～一六七二）

②不動坊の起こり・良弁創建説（古誌）と大相模郷・真大山不動坊の名付け

※ここではいつのことか年代が明記されていないが、後の資料によると天平勝宝二年（七五〇）となる。良弁は華厳宗第二祖、東大寺大仏造立に尽力し東大寺初代別当となる。

密教は既に七世紀後半には断片的な形で我が国に伝えられてはいたが、延暦二十三年（八〇四）に入唐した空海（真言密教・東密）・最澄（台密）によってもたらされて本格的に盛んになることから、不動坊の起こりが奈良時代であることに疑問が残る。

③不動坊の起こり・翁創建説（言い伝え）　延喜年間（九〇一～九二二）

※平安初期は不動明王など密教全盛時代。

太平洋戦争で供出されたこの寺の鐘には延暦年間（七八二～八〇五・延喜の誤りか）に鋳造したものを明和三年（一七六六）に再鋳造したと刻されていたと伝えられる。

④不動明王像の昔も今も変わらぬ霊験

⑤家鳴（やなり）不動のいわれ　　天文年間（一五三二～一五五四）

⑥不動坊と岩槻城主　　天文～元亀年間（一五三二～一五七二）

岩付太田氏全盛を築く岩槻城主太田資正（すけまさ）及び岩槻城将としての玉縄（たまなわ）城主北条氏繁の信仰と夫役（ぶやく）の免除。

⑦定伝（じょうでん）の前歴と密教の推進　　天正十二年（一五八四）

※原文では密教の寺に改めたと読み取れる。



密教の寺にはよく不動明王像が安置されているが、それまでは顕教（例えば華厳宗）の寺であったと考えてよいのか。それが天正十二年に密教（真言宗）の寺に変えたと言うのであろうか。

奈良東大寺（華厳宗）には九世紀末の作といわれる不動明王像が秘蔵されていることからもわかるように密教が他宗派にも強く影響を与えていた。それゆえ密教でない華厳宗に属していた不動坊で不動信仰が土着の人々によってなされていたとも推定できる。

定伝は後の資料によると大聖寺の中興［ちゅうこう］となる。

⑧定伝と家康　　天正十九年（一五九一）十一月

六十石の喜捨（きしゃ）と寺名の大聖寺への変更及び江戸城の鬼門となる。

⑨定伝の弟子入り　　慶長二年（一五九七）

京都醍醐寺の義演大僧正（ぎえんだいそうじょう）への弟子入り。

⑩定伝と家康　　慶長五年（一六〇〇）

関ヶ原の戦いに出陣する家康の戦勝祈願と寺宝となった刀。

※この中で、松平右衛門太夫、村越茂介、善阿弥の名がでてくる。茂介（通称）とは村越直吉（一五六二～一六一四）を指すのか。

※大聖寺では、慶長五年八月四日に家康がここに来て戦勝祈願をしたとの言い伝えがかつてあったのであろう。この旧暦のちょうど一ケ月遅れである新暦の九月四日に大聖寺で毎年行われる大会式（おおえしき）は、家康が戦勝祈願を行ったとされる旧暦の八月四日に由来するものと推定できる。

⑪隆元（りゅうげん）と大聖寺の火災　　享保五年（一七二〇）二月

※この中で、不動堂の無事が述べられている。

⑫隆元の大聖寺再建

⑬隆元の二天門創建　　正徳五年（一七一五）

※この中で二天門が享保五年の火災に免れたことが述べられている。

⑭大聖寺の伽藍神（がらんじん）である愛宕神社

⑮観如法師と家康のお陰で盛んになった大聖寺　天和元年（一六八一）

※この中で、一月、五月、九月の各二十七日に催される不動会（え）の盛んなことが述べられている（現在は二十八日）。

⑮現住職英山（えいざん）と「含満井（がんまんせい）」の起こり

※現在の参道東側の本堂そばの水屋の裏あたりにかつて水垢離（みずごり）があり、そばの弁天池（今も涌き水によって涸れずにある）から竹の樋（とい）で呼び水をし、戦後まで見られた。英山が『含満井』と書かれた立札を立てた所はここかもしれない。

⑯英山と瑞像記

次に全文の訳を紹介する。訳にあたって、石井章治郎氏（東京都足立区西保木間三－九－五）の協力を得た。

武蔵国の大相模にある不動様のめでたい像の記録

武州（武蔵国）崎玉郡（さきたまぐん）大相模郷（おおさがみごう）の真大山（しんたいさん）は（「者」＝「は」）、不動尊の霊域で、瑜伽（ゆが・ヨーガ）の浄（きよ）い土地でもある。もと寺誌（じし）一巻があり、其の文は纔（わずか）十余紙だったが、惜しくも、寛文年間（一六六一～一六七二）に紛失した。・・・

「此の地は不動明王の霊験あらたかな寺（にふさわしい）、須らく（ここに）安置せよ。」と。そこで忽然と姿を消す。翁は大いに驚き歓（よろこび躍（はね）て、「おそらく是（これ）は大山の大聖（だいしょう・み仏）が私に授ける所であろう。」と思った。そこで爾（そ）の処で、茅を切り払って像を安置した。翁は亦（また）多年にわたって苦行し、其の死去した所はわからないと言う。二つの縁起は稍（やや）異なっているが、併せて伝えよう。・・・

はそこで宝刀一振りを納め、像の冥助（目に見えぬ仏の助け）を乞い、且つ定伝に（三成を）降伏（ごうぶく・仏の力によって悪魔や怨敵などを押さえ鎮めること）するための法を執り行わせた。定伝は（神君の）命令を奉じて、勤行（ごんぎょう）に励み、勇み鋭く刀を竪（た）てて、壇上で声を張り上げて咒（まじな）って曰く「とても鋭い刀剣よ、魔軍を打ち破れ、明王の誓願（大日如来が変身して不動明王となり『一切の悪魔・煩悩を取り拉（ひし）がむ』と誓った事）、豈（あ）に徒（いたずら）に説くならんや。」と。そこで、刀で印（いん）を結んだ。十方（じっぽう・あらゆる方角）を護る宝刀は、忽ち西に傾き倒れ、盛んに、空中に音が起こり、宛（あたか）も武器が交わり鳴り響き、鎧（よろい）武者が競い走る如くであった。逆賊は果たして誅（う）たれ亡（ほろ）ぼされたが、其の日は対応しており、実りの秋の九月十五日である。此の刀は世々（寺の）貴重な宝物として伝えられ続けた（去＝～し続ける）。・・・・・⑩

享保（きょうほう）五年（一七二〇）二月の、寺の災難では、講堂（経典を講義したり説法したりする堂）・房舎が、あっという間に焼失した。（火の）勢いが熾（さか）んでもう少しで不動堂（不動様を安置している堂）に蹙（およ）ぼうとした。住職の隆元（りゅうげん）が、此の災いに遭ったのを悲しみ、とても嘆き泣いて祈願した。突風が忽ちに止み、巍然（ぎぜん・高くそばだつさま）として、免れることができた。・・・・⑪

その後、隆元は再建に力を竭（つ）くし、手ずから（自分の手で）錫杖（しゃくじょう・僧侶の持つ杖）をつきながら、遠いところや近いところ（など各地）を巡って資金を求めた。人々は群がり集まったので、わずかな期間で、目的は達成した。高い軒・飛ぶような甍（いらか）、赤い柱・麗しい軒先の横木（となす）。往時の（寺域の）外観を改め、現在の美しさになった。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・⑫

是（これ）より前に、正徳（しょうとく）五年（一七一五）、隆元は楼門（二階作りの門）を新たに建て、様式は巧を施し、こしらえは意を尽くした。楼上には釈迦三尊像・十六羅漢像を安置し、門の側（かたわ）らには、持国（じこく）・多聞（たもん）の二天像を置き、多くの人々の帰依（教えを受けて、深く仏の真実に従うこと）の目印とした。そこで三学（戒・定［じょう］・慧［え］の三種の実践修行）の継承発展の跡と成った。然るに志に之（これ）を願うこと深く、固（もと）より也（また）煙が衝（つ）いて軒に籠り、余りの火が棟を燻（くすぶ）らしたものの、毫（すこ）しも損なわれる所がなかった。見る者は其の不思議さに驚いた。⑬

（不動）堂の傍（かたわら）に愛宕（あたご）社がある。当山の開闢（かいびゃく・初め、開祖）の神として伝わる。又（また）僧（かつ）て東照君（家康公）の祠（ほこら）を修繕した時、特に伽藍（がらん・寺の建築物の称）を護る神と為ったのである。・・・・・・・・・・・⑭

天和（てんな）元年（一六八一）、観如法師は地を（不動）堂の南西に卜（ぼく）し、官（お上、役人、公）に申し上げて、旧制を増飾し、誠意を込めてお祀（まつ）りするに時宜を得た。念呪（ねんじゅ）を執り行うこと誠を竭（つく）した。嗚呼（ああ）神君ひとたび出るや、天下大いに定まり、勲（いさお）しを垂れること窮（きわ）まりなかった。庶民各々其の所を得て、徳沢（とくたく・徳によって教化して得た先人の残した恩恵）の余波を、此の寺に延べ及ぼした。（壇上の明かり用の）香油は欠かすことが無く、衣鉢（いはつ・僧尼の着る袈裟と托鉢の時に持参する鉢［はち］）は匱（ひつ）の中にしまわれず、瑜伽（ゆが・ヨーガ）を修める者は絶え間なく次々と続き、秘密（密教）仏乗（一切衆生をことごとく成仏させる教え）は日増しに繁栄・興隆（こうりゅう）した。（これは）則ち皆神君の賜物である。誰がこのことを思わないであろうか。昔より毎年、正月・五月・九月の二十七日は、不動会（え）と称し、都（江戸）や田舎からほうぼうより集まり、僧侶も俗人もどっと集まり、男女・児童も庭を填（うず）め堂を満たした。夜通し称名（しょうみょう・仏の名を唱えること）を渇仰（かつごう・仏を深く信じ仰ぐこと）し、歌唄（かばい）を誦呪（じゅじゅ）した。礼をもって敬いて各々さし当たっての事を祈るのは、関東での一つの盛んな事と謂える。・・・・・・・・・・⑮

※歌唄・・・梵語または漢文の偈（げ・お経などからとった詩文）を読み歌って（節をつけて唱えて）仏徳を賛美すること。

誦呪・・・密教の修法（しゅほう）で、真言（しんごん）・陀羅尼（だらに）などを節をつけて誦（とな）えること。

近ごろ現住職英山（えいざん）は、不動堂の荒れ朽ちるのを歎き、将（まさ）に之（これ）を営み構えんとした。且つ参詣者の盥漱（かんそう・手を洗い口を漱ぐこと）として淨（きよ）く用いるために、職人に命じ、（不動）堂の前に井戸を堀（ほ）らせた。堀ること数仞（じん・一仞は八尺）なるも、唯だ乾いた土ばかりで水を得ることができなかった。職人らは疲れ倦（う）んで、将に放棄して止めようとした。英山は本尊に水を得ようと求めて誓いをたてて祈った。すると幾らも掘らぬうちに、水が奔（はし）り湧き、沸き潰（つぶ）れた。滃漫（たんまん・水の広く遠い形容）として、玉のように潔く鏡のように澈（きよ）く、余流（本流から分かれた流）の末流の瀝（したた）りは、林の際（きわ）を潤し、洗う者は、身や手に垢（あか）・塵（ちり）を濯（きよ）め、飲む者は心や胸に煩わしい思いを蕩（なが）した。榜（たてふだ）して「含満井（がんまんせい）」と名付けた。・・・

武州大相模不動明王瑞像記

①武州崎玉郡大相模郷眞大山者阿遮之靈區瑜伽之淨場也舊有寺志一卷其文纔十餘紙惜哉至寛文中而泯焉曾讀古志者語曰昔在南京良弁僧正神化無方開導奘刹方到東國卜築相州大山精修嚴勵于時阿遮明王現形慰諭辨辨瞻仰生希有想便自刻木模其相貌長一尺七寸令侍者負所至必隨垂過此村俄而重如盤石雖百千人不可擧之即識有縁之地當留之驗將妥奉于此而誓曰如尊意則輕亦若羽試再擧之飄然猶鴻毛矣遂創一宇安置供養自尒以來鄉稱大相模山號眞大山

③寺名不動坊云又傳此像則與相



武州大相模不動明王瑞像記

武州崎玉郡大相模郷眞大山者、阿遮之靈区、瑜伽之浄場也。旧有寺志一巻、其文纔十余紙、惜哉至寛文中而泯焉。曾読古志者語曰、昔在南京良弁僧正、神化無方、開導奘刹、方到東国、卜築相州大山、精修厳励。于時、阿遮明王現形、慰諭弁。弁瞻仰、生希有想、便自刻木模其相貌、長一尺七寸。令侍者負所至必随。垂過此村、俄而重如盤石、雖百千人不可挙之。即識有縁之地、当留之験。将妥奉于此、而誓曰、如尊意則軽亦若羽、試再挙之、飄然猶鴻毛矣。遂創一宇、安置供養。自尒以来、郷称大相模山、号眞大山、

寺名不動坊云。又伝此像則与相

州大山之尊像同木所刻而用本根然延喜中有一異翁結廬居于郷之古荒川岸軀沐清流外以潔齋心欣佛乗内以精進常歸明王無復餘念旱潦疾疫凡有難則日夜巡行郷里誦明王真言以救濟無不其驗土俗呼為生不動翁詣相之大山年以十数其所祈願在得霊像一朝将赴彼山途歴平阜即令御所過一苦行者世云山卧負笈而坐于石上鬚髪垂下威容非常翁一面而互如故舊行者曰汝有何所須数往大山翁告以其志行者搏髀嚮然歎曰奇哉相会吾有瑞像秘之日久雖無価貨不欲易之今感汝懇祈則起開笈出不動明王像与之儼如極大威怒相非人工之所能及焉行者張眉指像危

坐謂翁曰汝知之耶嘗良弁法師感見明王真身手摹之者此像是也還而即去翁怪從其所之北數百步行者顧曰此地阿遮靈刹須安置于斯忽然不見翁大驚歡躍以為蓋是大山大聖之所授于予乎便就爾処誅茅安像翁亦苦行多年不知其所終云二縁稍異併以伝之抑草創以来數百餘霜奉仕像者或出家者流或優婆塞之類屢交替而像之霊應今古無異至天文初盗取持像去宿武江某宅其夜家屋鳴動震覆賊惶懼謝罪即送還像爾後有故則精舎必震故世人称曰家鳴不動天文弘治永禄元亀之間武之岩付城主太田資正及北条氏警崇信当山施貲除役謀家門栄矣天正十二

坐謂翁曰、汝知之耶、嘗良弁法師感見明王真身手摹之者此像是也。還而即去。翁怪從其所之北數百歩行者顧曰、此地阿遮靈刹須安置于斯忽然不見。翁大驚歡躍以為蓋是大山大聖之所授于予乎便就爾処誅茅安像。翁亦苦行多年、不知其所終云。二縁稍異併以伝之。抑草創以来數百余霜奉仕像者或出家者流或優婆塞之類屢交替而像之霊應今古無異。至天文初盗取持像去宿武江某宅。其夜家屋鳴動震覆賊惶懼謝罪即送還像。爾後有故則精舎必震。故世人称曰、家鳴不動。天文弘治永禄元亀之間武之岩付城主太田資正及北条氏警崇信当山施貲除役謀家門栄矣。天正十二



季沙門定伝者紀之根来寺性盛法印付法之弟子有道聲住持之便即一洗當山為⑧秘密伽藍其功寔為可稱焉厥后東照神君遊獵之次杜台駕於茲問像事縁傳蓁啓白之　神君曰靈哉汝其祈予福乎像矣十九年十一月　神君頻感像威驗召傳喜捨水田六十石御朱印及禁山内非常之書現存且命寺號大聖永為鎮護國家之道場乃此山鎮武城之鬼門也自茲已来別置僧六口令六坊是夙夜勠力祝禱昇平報謝君恩慶長二年傳詣京師而入醍醐寺座主義演大僧正之室親受秘密印璽瀉瓶倒底還寺薫練夜以継日弘⑩通三寶五年　神君帥兵征奥及經途於下野聞石田三成反于近江　神君還軍避暴雨急旌旗宿

季沙門定伝者紀之根来寺性盛法印付法之弟子有道聲住持之便、即一洗当山為秘密伽藍。其功寔為可称焉。厥后、東照神君遊猟之次、杜台駕於茲問像事縁。伝蓁啓白之。神君曰、靈哉汝其祈予福乎像矣。十九年十一月、神君頻感像威驗、召傳喜捨水田六十石御朱印及禁山内非常之書現存。且命寺号大聖永為鎮護国家之道場。乃此山鎮武城之鬼門也。自茲已来別置僧六口令六坊是、夙夜勠力祝禱昇平、報謝君恩、慶長二年、伝詣京師、而入醍醐寺座主義演大僧正之室、親受秘密印璽、瀉瓶倒底、還寺薫練、夜以継日、弘通三寶、五年、神君帥兵征奥、及經途於下野聞石田三成反于近江、神君還軍、避暴雨急、旌旗宿

寺松平右衛門太夫村越茂介善
阿彌等供奉來禮像　神君便納
寶刀一枚乞像冥助且令傳修降
伏法傳奉命精勤勇銳竪刀壇上
厲聲咒曰猛利刀劒摧破魔軍明
王本誓豈徒說乎則以刀印結護
十方寶刀忽而傾倒而鏘々焉聲
起於空宛如鋒鏑交鳴甲兵競走
逆黨果被誅亡則應其時日而然
實秋九月十有五日也此刀世々
⑪傳付以爲重器云享保庚子年二
月寺災講堂房舍一時焼失勢熾
殆暨不動堂住持僧隆元悲遭此
殃尊泣血祈請風颯忽息魏然得
免既而元竭力再営手自振錫乞
資遐邇四衆雨聚不日功就高軒
飛甍丹柱文榱改觀舊時曜美當
⑬今先於是正嘉乙未年元新建樓

寺。松平右衛門太夫村越茂介善
阿弥等供奉来礼像、神君便納
宝刀一枚乞像冥助且令修修降
伏法。伝奉命精勤勇鋭竪刀壇上
厲声咒曰、猛利刀剣摧破魔軍明
王本誓豈徒説乎。則以刀印結護
十方宝刀忽而傾倒而鏘々焉声
起於空、宛如鋒鏑交鳴甲兵競走。
逆党果被誅亡則応其時日而然
実秋九月十有五日也。此刀世々
伝付以為重器云。享保庚子年二
月寺災講堂房舎一時焼失。勢熾
殆暨不動堂住持僧隆元悲遭此
殃。尊泣血祈請。風颯忽息。魏然得
免。既而元竭力再営手自振錫乞
資遐邇。四衆雨聚不日功就。高軒
飛甍丹柱文榱。改観旧時曜美当
今。先於是正嘉乙未年、元新建樓



門規製施巧締構盡意樓上安釈
迦三尊十六羅漢像門則置持国
多聞二天像以為羣生歸入之標
乃作三學紹隆之址然志願之深
固也衛煙籠檐餘燬棟毫無所
損見者歎其不思議矣堂傍有愛
⑭岩社相傳當山開闢之神又嘗嘗
修　東照君祠特為護伽藍神天
⑮和元年觀如法師卜地於堂西南
白官增飾舊制禋祀以時修念竭
誠嗚嗥　神君一出天下大定垂
勲無窮衆庶各得其所而使德澤
之餘延覃此寺香油無缺衣鉢不
匱修瑜伽者縄々接踵秘密佛乗
日彌警興則皆　神君之賜也孰
不思之耶振古每歳正五九月二
十七日稱不動會都鄙輻湊道俗
雲集男女兒童塡庭滿堂通夜鴻

門。規製施巧締構尽意。楼上安釈
迦三尊十六羅漢像、門則置持国
多聞二天像以為群生帰入之標。
乃作三学紹隆之址。然志願之深
固也。衛煙籠檐、余燬棟毫無所
損。見者歎其不思議矣。堂傍有愛
岩社。相伝当山開闢之神。又嘗嘗
修　東照君祠特為護伽藍神。天
和元年観如法師卜地於堂西南、
白官増飾旧制禋祀以時修。念竭
誠。嗚嗥　神君一出天下大定垂
勲無窮。衆庶各得其所、而使徳沢
之余延覃此寺。香油無欠、衣鉢不
匱。修瑜伽者縄々接踵、秘密仏乗
日弥警興則皆　神君之賜也。孰
不思之耶。振古毎歳正五九月二
十七日称不動会、都鄙輻湊道俗
雲集男女児童塡庭満堂通夜鴻

仰稱名誦呪歌唄禮敬各祈現當

⑯之事可謂東閣之一盛事也頃歲

現住英山歎不動堂之荒朽而將

營構之且爲詣者盥漱淨用令工

師而堀井於堂前堀數朝而唯乾

土不得水焉工等疲倦將棄而止

山祈誓于本尊求得水乃穿不幾

則水奔湧涕漫玉潔鏡澈餘

流未遐林際潤沢洗者鐲垢塵於

身手飲者蕩煩想於心胸牓名含

⑰滿井矣山憂亡舊誌請予作記予

素無文思聊錄事實庶幾阿遮嵗

德巍々被缺舌辺鄙之邦遮那法

燈煌々至龍華開敷之曙云

享保第十四星次己酉仲秋之穀

武都寶林山靈雲精舍第三世

苾芻慧曦作文。



仰称名、誦呪歌唄。礼敬各祈現当之事、可謂東関之一盛事也。頃歲現住英山、歎不動堂之荒朽而将営構之。且為詣者盥漱浄用、令工師而堀井於堂前。堀数朝而唯乾土不得水焉。工等疲倦将棄而止。山祈誓于本尊、求得水。乃穿不幾、則水奔湧、涕漫。玉潔鏡澈、余流未遐、林際潤沢、洗者鐲垢塵於身手、飲者蕩煩想於心胸。牓名含満井矣。山憂亡旧誌、請予作記。予素無文思、聊録事。実庶幾阿遮嵗徳巍々、被欠舌辺鄙之邦、遮那法燈煌々、至龍華開敷之曙云。

享保第十四星次己酉仲秋之穀、武都宝林山霊雲精舎第三世、苾芻慧曦作文。



享保第十四星次己酉仲秋之穀

武都寶林山靈雲精舍第三世

苾芻慧曦作文



小沙彌光天薰沐書

小沙弥光天、薫沐書。

ℓ3阿遮（あしゃ）・不動明王
ℓ5泯（ほろびる）
ℓ6南京（なんきょう）・南都つまり奈良を指す
ℓ7奐（さかん）
ℓ8于時（ときに）
ℓ12識（しる）
ℓ14尊意・他人を敬ってその意志または意見をいう語
ℓ14飄然（ひょうぜん）・ひるがえるさま、ひらひらするさま
ℓ15一宇・堂宇一つ
ℓ20躯（からだ）
ℓ23巡行（じゅんこう）・目的をもって方々を巡り歩く
ℓ27山臥・中世まで多く見られる表記、今は「山伏」
ℓ29故旧（こきゅう）・旧友
ℓ31喟然（きぜん）・嘆く（溜め息をつく）さま
ℓ39刹（てら）
ℓ48惶懼（こうく）・おそれかしこむ
ℓ49爾後（じご）・以来
ℓ49精舎（しょうじゃ）・寺をさす
ℓ57枉駕（おうが）・乗り物を枉（ま）げてわざわざ訪ねて来るこから、相手の来訪を敬って言う言葉
ℓ57台駕・高貴な人の乗り物
ℓ64夙夜（しゅくや）・早朝から夜遅くまで
ℓ65祝祷・神官に依頼し神に祈る
ℓ68瀉瓶（しゃびょう）・師から弟子へ仏の教えの奥義をあまずところなく伝授する
ℓ68弘通（ぐつう）・遍く広める
ℓ71旌旗（せいき）・旗の総称
ℓ73供奉（ぐぶ）・お供
ℓ75精勤（しょうごん）
ℓ78鏘々（そうそう）・鈴や金玉などの音の形容、さかんな様
ℓ79鋒鏑（ほうてき）・鋒（ほこさき）と鏑（やじり）、転じて武器
ℓ82伝付（でんぷ）・伝えること
ℓ84殆（ほとんど）
ℓ85殃（おう）げつ・災い
ℓ85祈請（きしょう）・祈願
ℓ87遐邇（かじ）・遠い所と近い所
ℓ90規製施巧、締構尽意・共に対句で大体同じ意味
ℓ93作・～と成る
ℓ99禋祀（いんし）
ℓ102覃（のびる）
ℓ103接踵（せっしょう）
ℓ120巍々（ぎぎ）・高く大きいさま
ℓ125沙彌（しゃみ）・新しく仏法に入門した20才以下の僧

# 大聖寺の石碑

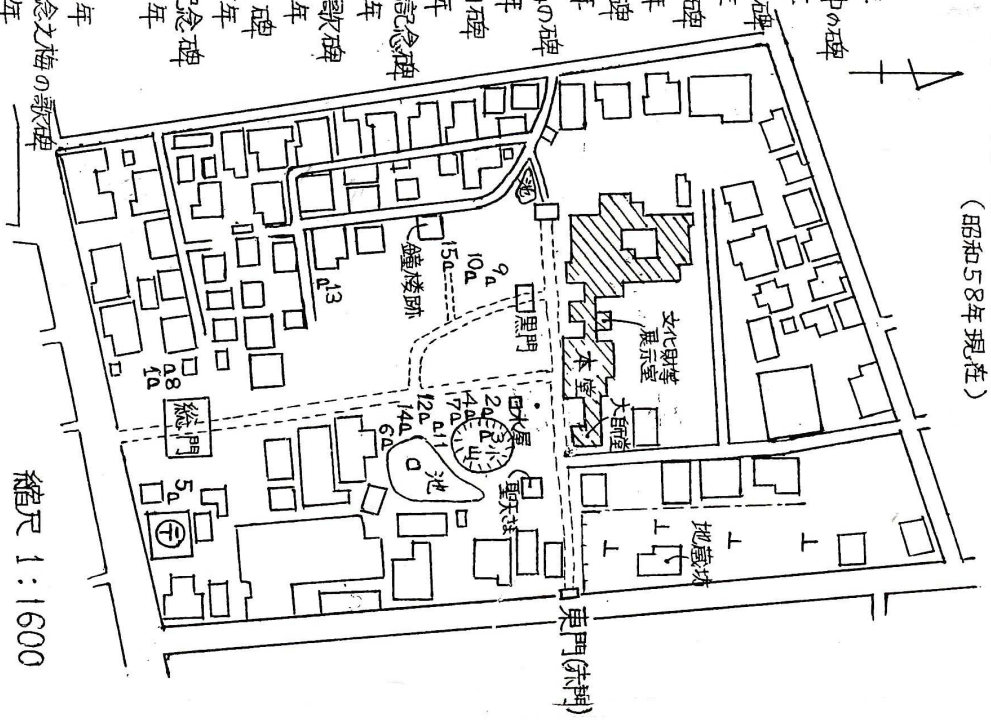
昭和５９年頃作成

平成２１年１月再版

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会　加藤幸一

# 大聖寺境内の石碑の分布図

（昭和58年現在）




縮尺 1：1600

（ゼンリンの住宅地図より）

## （1）『良弁塚』の碑

1．所在地　越谷市　西方　大聖寺境内
　現在は惣門の南西にある。もとは県道を渡って大相模中学校に通じる道の西側の林家の敷地内（惣門の南方約六〇㍍地点）にあった。戦後になって現在地に移転した。

2．大きさ　高さ三二〇㌢　幅一五二㌢　厚さ一六㌢

3．表　面　良辨塚　一百二十一祐尊上人筆

4．裏　面

良辨大僧都者　相州鎌倉の住　藤原姓　染屋太郎太夫時忠の姪也　寿山おもくら仏
道化縁の為ぞ　聖賢　再来もありなむ
僧都　幼けふくして　鷲乃翼に乗せられ　南都東大寺の山中　飛入しぬそ　成長の後
遍歴行脚せ路次　此所ろ笈をおろし　休息せらみし寸　不思義に　笈おもくして　挙らされは　こゝそ　有縁の地なるへきぬ　終ふ
此塚ろ　とゝまりしと也　其時の笈仏ぞ　今當山の本尊と仰く　不動明王是也　予と雲水せ頭陀なから　爰ふ杖を止め　仰き奉り
いとまの折ゝ　藏経を讀誦し　大般若六百軸牧細書し　法華経二十八品　一字一石ふ
書写し　又　昔　傳教大師　伊勢太神宮　日参の節　太神口授の法花経　一萬枚せ切紙ふ書

し　此塚ヲ納　且　武蔵相模の境　ゑふ乃坂下
今井村　金剛寺の先代　一百二十餘齢にし
て　一品親王ゟり　栢樹院　号を給ハられ
し寿山祐尊上人へ　予も折ふし　相見し　四
方山を語りしぬし　老僧のくまハく　其許
ハ　我らと同名なりとて　念頃ふかくられ
ゐほふ　序ふ　いそゝろるハ　我ら父ハ　下總猿
嶋郡　蓮臺村の長　染屋氏の支族　江戸ふ住
居して　まうけらるしなり　かゝる由来を
思ふに　良弁大僧都ハ　深き有縁ふりとて
良弁塚の三字を書し給ひし　予　是を此塚
のゑほしゑ致さゑ　普く結縁とゝなりふ
むと　石ふきさみて　建之
天保八　丁酉菊月　沙門壽山　謹識

※栢樹は白寿にかけている

※『ゑ』は『思』

5．解説

良弁：華厳宗第二祖。東大寺大仏造立に尽力し、初代別当となる。二歳の時、大鷲にさらわれ、東大寺境内の杉の枝に置かれていたのを通りかかった義淵が助けて養ったという良弁杉伝説がある。

この『良弁塚』によると、ここ大相模不動坊を開山する。

姪・国訓では「めい」で兄弟姉妹の娘。古くは「甥」の意にも用いた。

寿山・この碑を書いたお坊さん。西方福寿院墓地にある青面金剛の碑にもこの人の名が出てくる。なお当時の大聖寺の住職は、大聖寺境内にある天保九年の庚申塔の碑によると法印戒如である。

祐尊上人・今井村金剛寺の先代の住職で寿山祐尊上人とも言う。

祐尊百二十一歳の時に碑の表面の『良瀦塚』の字を書いた。

(2)　御手本講中

(大きさ)　高150cm　幅130cm　厚20cm

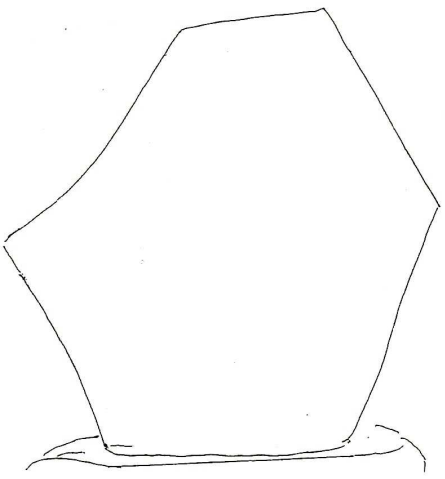
(表面)

御手本講中

七十一於霞翁書

(裏面)

四十七人の名と世話人十二人の名　及び「石工　長兵衛」が刻まれている

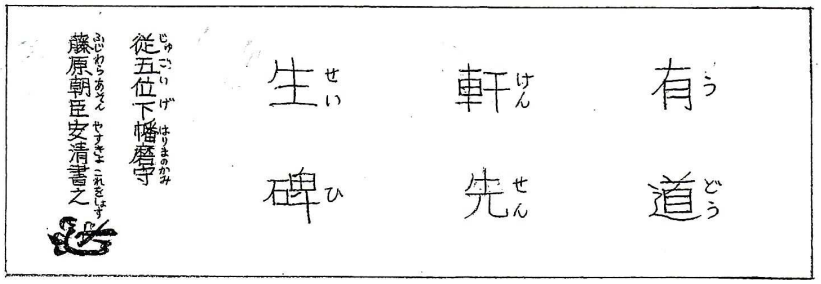


御手本講中の碑

## (3) 中村有道軒の碑

(所在) 西方大聖寺境内　(大きさ) 高200cm 幅170cm 厚20cm

(表面)




中村正光 丹書

武州埼玉郡東方村土豪曰中村萬五郎政敏本姓平氏其先出于高望王家世邑長政敏列大保正許稱姓氏考諱政諶稱七郎右衛門妣宇田氏天明四年甲辰十一月廿六日生自幼好擊劍從戸賀崎知道軒有道軒二先生學其術習練精熟年甫十八受初傳印可既而經歷諸州與有名劍士角逐其技率莫有及者即劍客之來試術者亦皆逡巡避席而退研究益不置盡傳其蘊奥遂受極秘印可開場授徒子弟蓋一千餘人其得與傳者不下數十人先是有福井翁者祈信州飯綱之神自捨以劍術靡倒一世偶異夢有所開悟遂名其術曰神道無念流傳之戸賀崎氏戸賀崎氏病將沒也恐傳法之或失其真盡舉秘訣授政敏曰吾兒尚幼今特付汝以有道軒之號以為教授門流之信汝其勉之政敏固辭再三師不許於乎遂泣拜受焉從此人稱中村氏曰有道軒先生有青藍之稱先生為人考順敦樸謹身色玩好之物一無所容其治家儉而有法暇輒寫書自樂所著劍道口達一書門人皆謄寫以傳云萬延元年庚申正月罹疾百治無驗遂以閏三月廿六日終於家年七十七葬阿彌陀山先塋之次配根氏生一男一女男七郎右衛門正迪嗣亦善劍法是為二世有道軒女適江戸長島氏銘曰

誰謂劍一人敵　兵法源實在茲　一人學至千人　三軍可以驅馳
而況神道無念　神之變可度思　於戲乎有道軒　劍術宗兵法師
萬延元年龍集庚申孟夏月　磐溪大槻清崇撰　梅巖福頼晉卿書

門人建

秋峯澤蒲書左右龍
吾立 辻信義

（中村有道軒の碑の裏面）

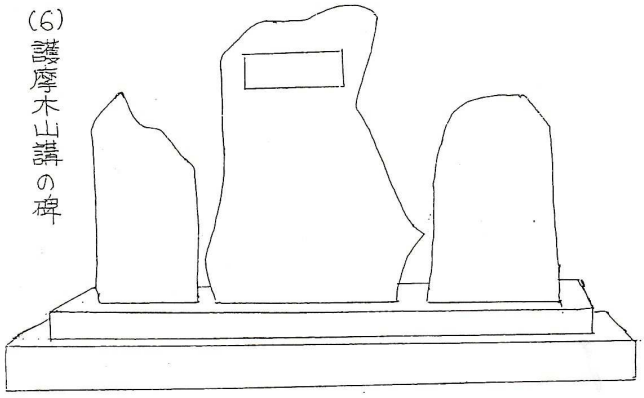
## 幹門

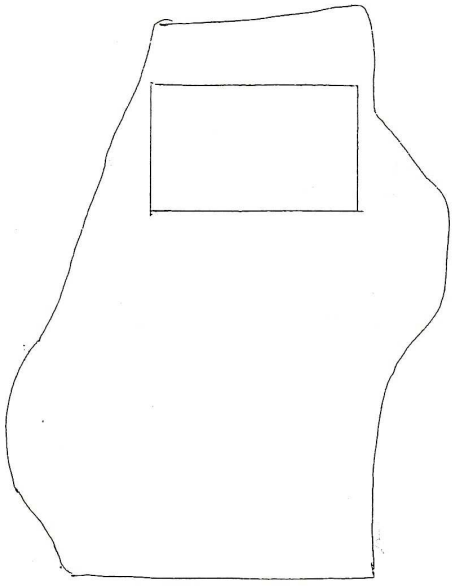
関根伊十郎重安　関根代安兵衛義武
津田又蔵功忠　神田要蔵邦貞
津田政次郎功幸　逸見熊次郎福演
千代田市太郎孝徳　関根多左衛門昭親　燭
高島五兵衛邦泰　蓮見岩松義正

芝崎雪之助　河野源龍之助
城津豊左門法　大川弥惣右門
八木清次郎　松井徳次郎
山崎市蔵　石小路次郎
関根知恵之輔　森田丑松
山崎勘蔵　小津田吉平
小宮吉五郎　逸見玖次郎
栗原喜七　関根与左門
関山久蔵　田代安太郎
横本吉源太郎　秋山造酒
会田弥七　中村庄太郎
関根平次郎　同猪兵衛
木村久保虎蔵　小島半十郎
高野幸次郎　浜野清太夫
横島敢八郎　岡野理左門
会田金平　荒木重左門
森田又左門　山崎浪吉
山上金兵衛　細野巳之助
大沢兵馬　山崎万蔵
石井安五郎　原要人
関根富三郎　高橋恒吉

金子高橋　服部泰輔　柳太郎
中村義三郎　鈴木鳳蔵
豊田仙次郎　青木熊蔵
新井孝蔵　加藤隆助
秋山吉十郎　戸張留五郎
豊田福太一郎　小沢九郎
内藤周助　秋葉佐兵衛
山崎政右門　鈴木次郎左門
太田為蔵　千代田平五郎
秋山弥之吉　多良雄次郎
戸張嘉蔵　古田市五郎
山口文蔵　関根次郎兵衛
田中利十郎　江村長左門
同暦蔵　岡田弥惣左門
篠塚平八郎　上原権六
瀬田文助　塩田文次郎
同宇右門　鈴木兵衛
梁谷友五郎　平野権左門
浅子重次郎　井上太郎
鈴木徳次郎　斎藤敬次郎
中村万吉　鈴木有斎
中村庄右門　小沢平太夫

岡野佐平次　飯嶋永本長左門
高崎松吾　永野半四郎
下田伝之助　鈴木春吉
鈴木直次郎　甲田三郎兵衛
石鳥伝蔵　大作八
中田忠左門　増田豊三郎
川鍋新七郎　小川久五郎
角田玄泰　小島武兵衛
富山清右門　堀井藤右門
木原喜十郎　同清左門
八木橋慶蔵　大貫万蔵
戸張吉蔵　白鳥忠次郎
矢島忠三郎　浅井惣吉
飯島和吉　秋山金之丞
山田平蔵　川尻由蔵
山崎貞蔵　竹内松五郎
川尻喜三郎　八木井熊吉
松永駒太郎　同儀三郎
遠藤喜三郎　中村三五郎
小林嘉内　高崎造酒三
荻野万右工門　鈴木正吉郎
山田保龍之助

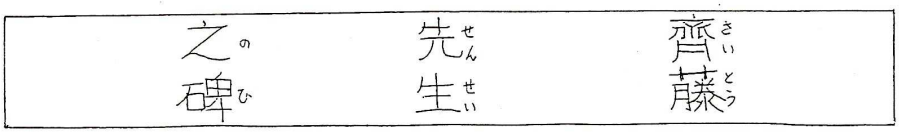

(6) 護摩木山講の碑


(4) 斉藤先生の碑

石碑の形（一部）

## (4) 斉藤先生の碑（所在）西方大聖寺境内

（表面）




（大きさ）高200cm　幅170cm　厚20cm

先生名徳行幼名利輔晩號大田齊是邑之人考稱林之助妣關根氏文化十一年甲戌五月五日誕有三男二女先生總角好學工書兼和歌又精理化學初仕万年氏執采邑之事勤勉竭誠用心于治水之事大得民心万年氏賞之授以姓氏明治維新之際致仕閑居江北優游文墨以書課業子弟就學者一百有餘名明治十五年十月二日卒年六十有九子弟輩傷悼相謀建碑欲遺芳名於後世云

明治十六年五月二日建之

言

蒋潭永戸思孝撰并書

かねてもちるものと　糸をもへとひとはかな

書者靜斎一葉　徳行

先生の名は徳行　幼名は利輔　晩号は太田斉　是邑之人　考は林之助と称し　妣は関根氏　文化十一年甲戌五月五日誕る　三男二女有り　先生は総角より学を好む　和歌も兼ね　書は工み　又理化学に精しい　初め万年氏に仕え　采邑之事を執る　治水之事に誠を竭し心を用いて勤勉し大いに民心を得る　万年氏は之を賞め　以て姓氏を授く　明治維新之際致仕し江北に閑居す　文墨に優游し　書を以て子弟に課業す　就学者は一百有余名　明治十五年十月二日卒る　年六十有九　子弟　輩傷悼し　相謀りて後世に芳名を遺さんと欲し建碑すと言う

総角……あげまき。またその形の髪をした幼者。転じて幼時。

理化学……物理と化学。

万年氏……西方村内にあった知行所（旗本が治める領地）を治めていた武士。旗本である。

采邑……旗本のおさめる知行所。

致仕……官職を辞して隠居すること。

江北……大きな川（元荒川）の北側。

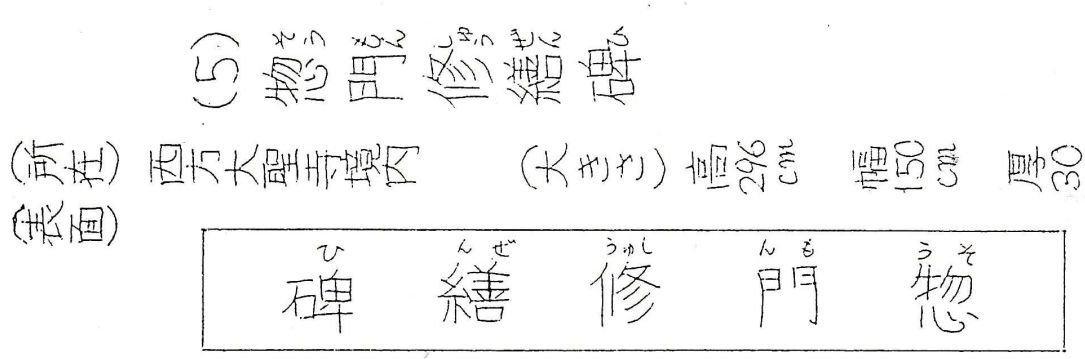
文墨……詩文を作り或いは書画をかくこと。

優游……暇があってのんびりしているさま。

（裏面）

発起幹事見田方高崎宜治以下七十八名を刻む

彫工松伏伊藤平蔵




夫積善徳行の基礎朽る事あらんや　爰ニ當寺廿三世の住木食戒圓師二王門
東き八法不非と發願し　十方ノ信者不助成を得て文化元年十二月始て瓦葺ノ大
惣門建立し　後ち嘉永元歳不至り經る事四拾五年不して大破を　時不三十世の
信剛比丘廣く有志を受再興し　屋根ヲ銅版ニ葺換を　永世不朽ノ恵の外
明治十三年に及て僅不三拾余年不して損破す　修補成り難ク　西方　東方
見田方三村の信徒同盟五十余名一致相議し　懇篤世話方不盡力す　八方
有信の淨財を納得し　明治十七年不至り修繕銅板葺落成を　宜ふる哉是即ち
本尊明王の威徳ノ衆庶ノ功徳と利益感應して成就する所謂なり　因て衆
有志に報ル不五穀成滿家内安全子孫繁昌の祈念怠る事なし　其功勲を
碣不勒して後賢の為に備んノ爾云
明治二十一年四月

當寺三十二世住眞島戒信謹誌

（惣門修繕碑の裏面）上　部

寄附者244名と
修繕世話係56名と
大工5名と
真島戒信（当寺三十二世）・会田永保（安養院）・
東方村観音寺・当村福寿院・土砂持集金
が刻まれ、　また それぞれの
上部には、寄附の金額と刻まれている
石工は　草加の青木泉次

# 名　附　寄

一金三円　深井七郎兵工（南埼玉郡伊奈村）
一金五円　関根八右エ門（登戸村）
一金四円　浜野富右エ門
一金三円　仝　時蔵
一金三円　関根喜左エ門
一金三円　森田園五郎
一金三円　岩淵佐右エ門
一金三円　駒崎又七（谷塚村）
一金三円　中村喜太郎
一金拾円　藤田善兵工（乃木村）
一金三円　中村信太郎
一金三円　秋山政太郎
一金三円　金子秋太郎（松ノ木村）
一金五円　豊田文治郎（南百村）
一金五円　中村七郎兵工
一金三円　豊田久治郎（蒲生村）
一金拾円　中野弥三郎
一金五円　神谷道之助
一金五円　清村清十郎
一金三円　中野浅右エ門
一金三円　大熊安右エ門

金三円　大熊喜左エ門（蒲生村）
金三円　中尾宗庵
金三円　中野七郎左エ門
金拾円　飯島みね（四条村）
金三円　仝　前五郎（立沢村）
金三円　藤波伝左エ門（南百村）
金五円　豊田佐右エ門（大曽根村）
金三円　細沼範十郎（増林村）
金五円　根本　熊（増林村）
金三円　池沢勝蔵
金三円　滝田文右エ門
金三円　百木平右エ門
金三円　仝　平八郎（増林村）
金五円　森田新兵工（増林村）
金三円　平林恒蔵（太郎右エ門ダバタケ）
金三円　高橋庄吉
金三円　須賀恵兵工
金三円　尾ケ井長七（金町ゼンジロ）
金三円　加藤弥三郎（栗谷ツ村）
金五円　江原保之進
金三円　山口紋蔵（向畑村）
金五円　鈴木初右エ門
金四円　大貫万吉
金三円　鈴木八郎兵工
金三円　浜埜源五郎
金三円　北川勘七（長野村）
金三円　大善寺伊兵工
金三円　鈴木作左エ門

金三円　黒田慶太郎（弥十郎村）
金拾円　長埜権兵工（大畑村）
金五円　深埜恒三郎（大畑村）
金三円　原　慶三郎（大場村）
金三円　鈴木治右エ門
金五円　吉岡太左エ門（上間久里村）
金三円　吉岡太蔵（上間久里村）
金三円　高橋八蔵（下間久里村）
金三円　平　仙右エ門
金拾五円　浜野甚四郎（黒浜村）
金三円　中村嘉右エ門（飯塚村）
金三円　吉田楳之丞（ヨシエ村）
金五円　松沢篤之助（七左エ門新田）
金三円五銭　大塚源左エ門
金三円　桜井屋右エ門
金三円　増田兵右エ門
金三円　野口八郎左エ門
金三円　井出庸造
金三円　川上林右エ門
金三円　秋山善太郎
金拾円　関根宇一郎（谷古村）
金五円　仝　貫次郎
金三円　川津宗吉
金三円　中村米蔵
金三円　堀江豊吉
金三円　仝　惣吉
金五円　中村賢之輔
金三円　吉補（恩間村）
金三円　浪辺（鴻巣町）
金三円　田村武平次（神明下村）
金三円　仝　五郎左エ門
金三円　仝　守右エ門
金四円　坂巻由之（大川戸村）
金三円　島村藤八
金三円　横川音吉

金三円　横川長兵工（大利根村）
金五円　鈴木藤助（川ブチ村）
金三円　仝　伊三郎
金三円　山崎森左エ門（赤沼村）
金三円　田中恒固
金五円　細野已之助（赤堀村）
金三円　山崎文治郎
金三円　仝　友七
金拾円　時田善三郎（上内川村）
金八円　岡田徹郎
金三円　仝　簾治
金三円　豊田市松（田ツ村）
金五円　井上源兵工（赤沼村）
金三円　岡野慶次郎（平沼村）
金拾円　高鹿新八
金五円　田中長蔵（小松川村）
金五円　反　平蔵
金三円　仝　弥左エ門
仝三円　藤波治助（木ウリシン村）
金三円　柴田郡次
金三円　大沢清次郎
金三円　仝　春吉
金三円　宇野与八（ミツノ村）
金三円　大沢次郎兵工（八トミ村）
金三円　増田平兵工
金三円　関山伊右エ門（会ノ村）
金三円　関根宇右エ門（東カツシカ郡北村）
金五円　伊藤惣兵工（東カツシカ郡北村）
金三円　豊島友七
金三円　山本市太郎（大畑村）
金三円　大作巳之助（小屋村）
金三円　大作巳之助（金ノ木村）
金三円　岩井八郎（中島新田）
金拾円　飯島常五郎
金七円　鈴木昌太郎（北葛飾郡ハナブサ村）
金五円　関根徳右エ門
金五円　森田政之助
金三円　新井倉之助（サイトウ浅井村）
金三円　浅井助蔵（石塚村）
金四円　山下銀蔵
金四円　仝　亀右エ門
金三円　石川治左エ門（江戸内）

金五円　田中宗次郎（金右エ門新留）
金三円　駒崎八郎右エ門
金三円　田中伊助
金三円　中村竹次郎
金三円　仝　梅次郎（楳）
金三円　仝　半七（舩）
金三円　早船覚治郎（舩）
金三円　井上彦次郎（染谷村）
金三円　仝（行）荻原万吉
金三円　三枝宗左エ門
金三円　守屋園右エ門（北葛飾郡ホキマ村）
金三円　秋元典幸（埼玉県士族）
金拾円　大川加右エ門（北葛飾郡ヤモリ村）
金三円　会田米吉
金三円　大野佐平次（会本石町）
金三円　山田茂兵工
金三円　野口清次郎（行トウカクカツシカ郡）
金三円　服部与兵工（東京ヒガシヨツギ町）
金三円　吉沢与兵工（東京横尾ホ少と）
金五円　横尾ホ少と（芝田町）
金四円　秋田淳良（牛込ハシラギ町）
金三円　中村源六郎（荒井周六町）
金三円　横川勘治郎（当新見村）
金三円　谷塚源治郎
金三円　高崎沢次郎
金三円　谷塚源治郎
金三円　仝　金七
金三円　仝　吉兵工
金三円　仝　長七
金三円　仝　植竹熊蔵
金五円　関根平蔵（根）
金五円　谷塚惣次郎
金五円　中村栄次郎

金五円 当所東方村 佐藤伝八
金五円 仝 市蔵
金五円 宇田園次郎
金五円 中村亦蔵
仝五円 浜野七郎右衛門
仝四円 石垣健次郎
仝四円 高島熊蔵
仝四円 中村三蔵
仝四円 荒井新蔵
仝四円 三本松次郎
仝四円 中村三衛門
仝四円 荒井関之助
仝四円 大熊武右衛門
仝四円 高橋伝助
仝三円 石垣万蔵
仝三円 中村元次郎
仝三円 山崎幸八
仝三円 宇田初五郎
仝三円 仝 ゆみ
仝三円 仝 岩蔵
仝拾五円 当所西方村 石塚小ゝみ
仝拾円 深井茂吉
仝拾円 斎藤長左衛門
仝拾円 仝 甚蔵
仝七円 仝 七蔵
仝七円 須賀平内
仝七円 田村庄蔵
仝六円 荒井作蔵
仝六円 野口喜左衛門
仝五円 石塚国五郎
仝五円 浜野縫吉
仝五円 斉藤勘左衛門
仝五円 仝 春吉

金五円 当所西方村 荒井嘉兵エ
仝五円 深井まつ?
仝拾五円 真島 戒信 安浪院 会田 永保
仝拾五円 東方村 観音寺
仝八円 当村福寿院
仝百円 土部持集金

金百五円 当寺三十二世
金拾五円 宇田幾之助 見田方村
仝拾円 関根松次郎
仝七円 中村寅吉
仝拾壱円 谷塚五郎左衛門
仝八円 横川平左衛門
仝六円 宇田宗吉
仝六円 完倉伊之助
仝六円 仝 馬之助
仝六円 植竹考吉
仝五円 浅見銀蔵
仝五円 宇田 茂七
仝五円 横川彦兵エ
仝五円 宇田 寅吉
仝五円 高崎新右衛門
仝五円 宇田亀次郎
仝五円 関根半三郎
仝四円 谷塚角松
仝拾五円 中村七郎右衛門 東方村
仝拾円 仝 治太郎
仝拾円 助 万右衛門
仝八円 中村佐吉
仝七円 浅見勝太郎
仝六円 染谷房五郎
仝六円 高崎伊十郎
仝六円 高橋甚蔵
仝七円 脇田庄右衛門
仝六円 谷塚長五郎
仝五円 浅見仰之助
仝五円 鈴木新六

金拾円 東方村 平林惣次郎
仝拾円 中村俊太郎
仝九円 脇田平留右衛門
仝七円 大塚新右衛門
仝七円 高島園吉
仝拾円 平林直次郎
仝六円 高崎伝? 内
仝六円 助 勝五郎
仝五円 藤波喜三郎
仝五円 石垣喜兵エ
仝五円 荒井浅蔵
仝四拾円 秋山吉重郎 西方村
仝三拾円 山田平三郎
仝三拾円 鈴木仁左衛門
仝拾円 斉藤七郎兵エ
仝拾円 石塚半次郎
仝五円 浜野頼江

金拾円 東方村 斉藤岩蔵
仝拾五円 山崎新左衛門
仝拾五円 斉藤孫兵エ
仝拾円 秋山弥之吉
仝拾円 斉藤敬次郎
仝拾円 小沢物六郎
仝三円 斉藤岩蔵
仝拾八円 篠田保太郎
仝拾五円 池ノ谷五六郎
仝壱円 石塚六郎左衛門
仝壱円 秋山六郎左衛門
仝拾五円 深井仁左衛門
仝拾円 石塚半次郎
仝五円 浜野頼江

大工 西方 大熊伝兵エ
ミ 横川隆三郎
ヒガシ方 宇田和吉
コシヤ 中村孝吉
カマヤ 井上市兵エ
草加 石工 京次

（面裏の碑繕修門惣）
下部

# (6) 護摩木山講の碑

(所在地) 西方大聖寺境内
(大きさ) 向かって右 高180cm 幅95cm 厚10cm
中 高267cm 幅190cm 厚10cm
向かって左 高189cm 幅90cm 厚10cm
(高さは台座から)

(向かって左の碑の表面左端)

我真大山乃本尊ぞ 往昔 天平勝寶二年 人皇四十七代
孝謙天皇の勅旨を奉し 良辨僧正 相模國大山を登り 専修錬行の暁 不動明王の尊容を雨降木に現し玉ふ故拝し 其端を以て一刀三礼の尊軀を彫刻し奉る 爰に納めて鎮国を巡化し 當所を過玉ふ 折しもその冬重く降て 一歩も進むこと能わざるに依て此處を有縁の地と定め 堂宇を営みて安置し玉へるなり 仍名て大相模と唱へ 山号を真大山と称せるは 本尊安置の由緒并に係るところのおしえ 元亀天正の頃 公武大いに帰依し 徳川將軍家康公 信仰殊に厚く 朱印及宝物等寄附ありて 三壇三時の祈願所と為給へり 然るに星霜移りて旧観を失ひ 既に往時を追懐せしむるに至れり 是を以て去ぬる明治十四年二月十八日 官許を得て護摩灯明講を結成をしに 資金数千を得るに至り 今護摩木苗植附乃ち地八百七拾五坪を購求し 寄附せらるに至るをもって 仍て其講社有志の誠意を表せんが為 各自の姓名を刻する 明治廿六年五月

真大山三十三世現住 沙門龍善敬誌

## (7) 互任連の句碑

（所在）西方大聖寺境内
（大きさ）高170cm 幅100cm 厚13cm

（表面）

無在女

晴れ渡る空と　庭の藪あけて　梅の花

ゆゆあみしてうちいつもさすすみ男と成りにけり

名月や　池の鏡の　うら表　人の影も　なき夜なりけり

初つらな　井戸をのぞけば　水の音

手をうてハ（注）　あいろいと　答つ　獲物一貫

（裏面）

三ヶ市　春　氷　梅

花の山　狩　幸　魚

明治三十丁酉年菊月建之

## (8) 征清軍凱戦記念碑

（大きさ）高さ230cm 幅95cm 厚14cm

（表面）

征清軍凱戦記念碑

草加石工
青木宗次鐫

（裏面）

表書

陸軍少将福島安正君書

従軍（ここに計15名の名が刻まれている）兵員

武蔵国南埼玉郡大相模村徴兵慰労義会々員建之

## (9) 御座の松の歌碑

(所在) 西方大聖寺境内　(大きさ) 高160cm　幅80cm　厚20cm

(表面)

御座の松　　隆圓

とこしへに
有為
国をまもらむ
もとの
ちかひをは
(違)このみそ

(裏面)

たゝひと
松に
のこして

寄信芳名

| | |
|---|---|
| 草加町 | 山川　仁兵衛 |
| 出羽村 | 荒井吉右衛門 |
| 同 | 會田　清太郎 |
| 東京麹町區飯田町半丁目 | 逸見　元一郎 |
| 同日本橋區本舟町 | 福井　市之助 |
| 同區堀江町二丁目 | 同　鎌太郎 |
| 越ケ谷町 | 山田　茂兵衛 |
| 大澤町 | 福井權右衛門 |
| 發起人 | 同　松陰 |
| 同 | 順子　七十一才 |
| 石工　草加町 | 青木京次 |

真大山中興第一世高岡隆圓師之歌

明治三十六年七月建焉

## (11) 日露戦役記念碑

(大きさ) 高320cm　幅110cm　厚12cm

(表面)

日露戦役記念碑

希典書

(裏面)

戦傷病死者（6人の名が刻まれている）

明治三十九年十一月

埼玉県南埼玉郡大相模村徴兵慰労義会建設

従軍者

召集被仮者

（68人の名が刻まれている）

## (12) 降魔松

(大きさ) 高85cm　幅45cm　厚20cm

(表面)

降魔松

寄附者　草加町　青木京次

（向かって左側面）

明治四十年九月

松栄講　東京縁日商

御座之松
座

永代修繕連名

芝　原　巳之吉　　原　美代松　　平井伊太郎　　西田平七　　小野田徳次郎　　浅草帳元　　世話人　　森田金太郎　　花又松岡次良吉　　今村元次郎　　猪子為次郎

日京　松尾清吉　　堀川仙太郎　　松宮金三郎　下谷　植田鎌五郎　　渡辺仙吉　　古市弥太郎　　亀谷保太郎　　伊藤京太郎　　浅井孝二　　矢部栄太郎　　鈴木重吉　　布施童三　　杉本寺吉　　勝本新五郎　　箕輪幸次郎　　平井常三郎　　杉本スヾ

西神田帳　元　下谷　江川滝太郎　世話人

鬼丸泉一郎　　山本由太郎　　渡辺広吉　　古賀金三郎　　仲谷米造　　岩田音吉　　増田伊佐吉　　西川柴太郎　　池上定次郎　　平野常次郎　　大野与吉　　山田為次郎　　池田林蔵　　宇城作次郎

相原角次郎　　中川鉄蔵　　鈴木良助　　永田友吉　　冨山竹次郎　　村松徳次　　細野力造　　清水徳太郎　　殊岡健重

発起人

正木信太郎　　内藤梅吉　　勝田佐太郎　　荒井辰五郎　　樋口久吉　　矢崎近次郎　　下谷坂町　斉藤規矩郎　鍛冶職　　中津勝次郎　　植木職　　島村元次郎　　石工　草加町　青木宗次

（裏面）

（表面）

此松は　延慶二年の昔　今の地に　遷佛の時　その御座を常之にと　うるしものなるに
よりて　名をは　しかいふなり　星移り　ものかはりて　太田資正北條氏繁なとしはく
遊覧せられ　又徳川家康公も深く愛し給ひて　遂に御朱印をつけ給ふに至る
降て明治二十八年七月　大火にあひしか　その烟に薫れなからその一葉おも損せす　ひと
みなふしきの思ひをなし　俗に火除の松ともよへり　こたひ斎藤規矩郎居士　發
起となりて　この為に何くれとなく　力を尽して至らさるなし　願くは此功徳を以て　あ
まねく四恩に及ほし　自他倶に十善を行し　佛の誓願をして　もれなからしめんことを
みほとけの　ともにしあれは　御座の松　佛法僧もきて　やすむ覧　　隆圓

（裏面）

（表面）

## 碑の読み下し文（一）

※この石碑から、本堂が焼失した大聖寺の大火は明治二十八年七月にあったことがわかる。

## (13) 日露戦役記念之梅の歌碑

(所在) 西方大聖寺境内　(大きさ) 高110cm 幅70cm 厚23cm

(表面)

千代梅　従一位藤原實愛 九十四歳

かきりなき　春を重ねて
匂ふらむ　八千代の梅の
高きかをりは

(裏面)

日露戦役紀念之梅
従一位勲一等　嵯峨實愛公詠書
勲　九十四歳

東京府　下向嶋寺島

寄附人　松本常太郎氏
　　仝妻キク子

明治四十二年一月新建　眞大山
草加町
四代　青木宗義彫

## (14) 誠忠碑

(表面)

誠忠碑

参議院議員　上原正吉謹書

(大きさ) 高320cm 幅120cm 厚23cm

昭和六年九月十八日 満州事変 昭和十二年七月七日支那事変
昭和十六年十二月八日 大東亜戦争 昭和二十年八月十五日終戦
昭和四十二年三月建

(裏面)

戦没者 (106名刻む)

召応者 (263名刻む)

委員長 池ノ谷与一郎
副委員長 (2名刻む)
仝
委員 (28名刻む)

特別賛助者 (19名刻む)

中野春吉謹書

# (15) 鶏魂碑

(所在地) 西方大聖寺境内　(大きさ) 縦92cm　幅84cm　厚13cm

(表面)　鶏魂碑

(裏面)　越谷養鶏の沿革

埼玉県の東部　沖積地に位置する越谷は　元荒川　綾瀬川　古利根川が流れ水郷の地として知られる　当地に人びとの生活が展開されたのは　見田方遺跡の発掘により　古墳後期から古代にかけてと推定されており　天平勝宝二年(七三〇)の創立を伝える大相模不動尊をはじめ　野島の地蔵尊や　越谷の久伊豆神社など悠久一千年の歴史を伝える多くの旧跡があり　これらを中心に集落が形成されてきた　江戸時代は水稲を中心とした穀倉地帯として　大きな役割を果たしてきたが　また交通の要衝として　日光道中越谷宿が取り立てられ　かつ六斉市により商圏の中心として栄えた　近代に入り　農業は畜産や工業などを取り入れ　多角的な経営に移行していった　このなかで養鶏は大正期から数人の先覚者により経営されるようになったが　当時は全く初歩の段階であり　すべてが手探りの状態であった　当初は平飼で　母鶏孵化により雛を育成したが　その後　優良雛の導入や飼育方法の改良がはかられさらに　昭和の時代に入ると土地の効率化や管理の簡素化をはかる必要から集約養鶏が考えられ　昭和十年にわが国で初めて鶏舎を立体化した三段式バタリー方式による飼育方法が考案された　その後　戦中の飼料不足で　一時衰退したが　戦後急速に進展をみて昭和四十三年には飼養戸数五〇〇戸飼育羽数は一〇〇万羽にも達し　その販売額は米作を上回る販売額となった　こうしてバタリー方式による養鶏の発祥の地として　また集約立体養鶏においては他に類をみない規模となった　このため　全国各地から視察に訪れる者　跡を絶たず　越谷養鶏方式が全国に普及した　これがしいては現在のケージ養鶏の基をひらいたものであり　わが国養鶏産業に与えた功績は　計り知れないものがある

今やわが国の養鶏産業は　アメリカに次ぐ世界第二の生産高を誇り　国民の健康増進に大きな役割を果たし　民族永遠の繁栄に貢献できるのもこの先覚者たちの血と汗の結晶であり　その功績を高く顕彰するものである。

ここに養鶏を業とする者及びこれに関係する多くの業者相集い　人類生存のためその生を全うせず生命を断った多くの鶏群霊に対し　その霊をなぐさめるとともに越谷の地がわが国集約立体養鶏の発祥の地であることの由来を記し　永く後世に伝えんとするものである

昭和五十八年九月二十八日　建之

越谷市養鶏協会々長　森屋英龍　撰文

鶏魂碑　建立　奉賛者名

越谷市養鶏協会
会長 森屋英龍
副会長 笠口年五郎　岡安忠蔵
理事 尾島田三之一　石井直吉　大野塚重男　鈴木隆一　平塚義喜久　石塚長五郎　石川信蔵　浅岡安子　森田安徳之助
会計 石井昭雄
監事 辻峰弘志　横川雅夫　山崎武美　江原好太郎　名倉友三郎　秋谷賀一　小川俊夫　須賀会計

須賀友五郎　宮石忠志　石井正男　須賀又市　須賀吉太郎　宮川章一　川恵忠義　柳亀之輔　齊藤一

越谷地区食鳥肉組合
組合長(有) 鳥正 小山昇
副組合長(有) 野口喜代三郎　(有) 染谷博
理事 小沢澄
会計 (有) 浜野食鳥店
(有) 高島屋本店清
(株) 秋山商店
大内食鳥店
鳥安商店忠
(有) 鳥正商店男
(有) 深井商店
(有) 半戸正好
入沢秋男
木商店

飼料鶏卵会社
大洋飼料
豊橋飼料
日本農産工業
伊藤忠飼料
中部飼料
鈴木商店
須賀商店
大野飼料
松山商店
石川産業
埼玉鶏卵センター
伊勢商店
須賀文蔵
鈴木卵之吉
(株) 勝田商事
(有) 中里薬局
薬品器具
(株) 武田薬品
(有) 稲垣太陽堂薬品
(株) 力ドヤ
(有) 化血研
(株) 日生
(株) 和光化工
(株) 大協
(株) 八畑デ孵化場
(株) 後藤孵卵場
(株) 服部養鶏園
(株) 日本若めす育雛場
(株) 森兄孵化場

眞大山大聖寺
第四拾世　弘庭　謹書

# 大聖寺保管の板碑紹介

加藤幸一

## １．板碑とは

板石塔婆とか、青石塔婆とも言われる板碑は右図のような石でできた供養塔である。自分の死後の冥福を祈る逆修供養、あるいは死者の冥福を祈る追善供養のために建てたものである。板碑は中世に始まって中世に終わるといわれるように、鎌倉時代中頃から室町時代後半にかけて造立し、わずかであるが近世にはいって安土桃山時代の慶長年間までみられる。江戸時代以降の造立は全くとだえてしまう。




板碑の特色は次の四つがあげられる。

①頂部は三角形（頂部山形）になっている。

②頂部の下に二本の切り込み線（二条線）がはいっている。

③一個の石材で作られている。県内では秩父で採れる緑泥片岩（秩父青石）を使用している。

④一面のみに刻まれている。裏には何も刻まれていない。

右上の図を説明すると次の通りである。

主尊・・・拝む対象としての仏様。上図では阿弥陀仏を表す梵字キリークである。わずかであるが梵字でなく図像で描かれている場合もある。

蓮華台・・仏様を安置するための蓮の花でできた台。

偈文・・・経典からとった一節。仏を讃えたり、仏法の真髄を述べたりしている。この図の場合は観無量寿経という経典からとった四句からなる詩文である。偈文のことをただ単に「偈」とも言う。

願文・・・願いごとの文、つまり造立の趣旨を表した文である。

この図の場合は、「右志者　慈父幽儀成仏也　孝子敬白」と刻まれていて、子が父の追善供養のために造立したことがわかる。

紀年銘・・刻まれた年月日をさす。板碑を造立し、供養した年月日を表す。この図の場合は、「正嘉元年丁巳十二月晦日」と刻まれている。

## ２．板碑の本場、埼玉県

最古の板碑が、荒川流域近くの埼玉県江南村の大沼公園弁天島で発見されるなど、ごく初期の板碑が埼玉県大里郡、北埼玉郡、北足立郡の荒川に近い地域に分布していることから、板碑の発祥地は荒川中流域と考えられている。その板碑の石材として、荒川上流の秩父地方で採れる、板状にはがれやすい性質をもつ緑泥片岩が利用された。これらの板碑を武蔵型板碑といい、埼玉県内を流れていた当時の荒川流域を中心に、埼玉県の他に東京都全域、群馬・栃木・茨城の各県の南部、千葉県の西部、神奈川県の東部などに分布している。これらは全国でも最も形態が整っていて、数量も最も多くみられる。つまり、武蔵型板碑は質量とも全国一を誇っているのである。特に埼玉県は板碑の本場である。埼玉県教育委員会が昭和５１年（１９７６）１０月から昭和５６年３月までの５カ年間の月日をかけての板石塔婆緊急調査によると、昭和５５年９月３０日現在で、２０，２０１基を確認している。

## ３．越谷市の板碑

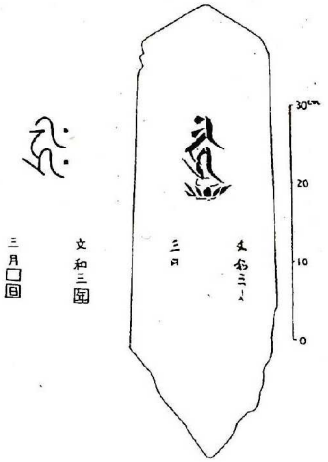
板碑は川を利用して各地に運ばれたと考えられている。越谷市内を貫通している元荒川は当時の荒川主流であったため、市内各地に板碑が豊富にみられる。昭和４４年発行の「越谷市金石資料集」によると、９６基及び破片４０数個が確認されたという。その後もかなり発見されていよう。再調査が必要である。

## ４．大聖寺保管の板碑

現在、大聖寺（大相模不動院）では、１１基保管され、１基が所在不明である。１１基のうち３基は越谷市の板碑調査後にわかったものである。

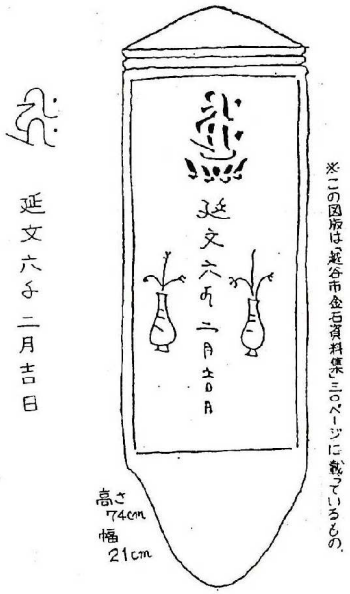
## No.1　文和三年(1354)弥陀一尊種子板碑

蓮華台に載った主尊の種子キリークは荘厳体で刻まれている．蓮華台の上部には花心を描いた跡が一部残っている．紀年銘の「文和」は関東に一般にみられる北朝の年号である．なお、南朝では正平九年にあたる．この板碑の表面はかなりすり減っていて、銘文の判読が困難である．中央には文和三年三月に逆修供養（生前に自分の死後の冥福を祈る）した人の法名（仏門に入った人や死者に授ける名前）が刻まれていたと思われる．この板碑は西方番場の斉藤正雄氏の所有である．




## No.2　延文六年(1361)弥陀二尊種子板碑

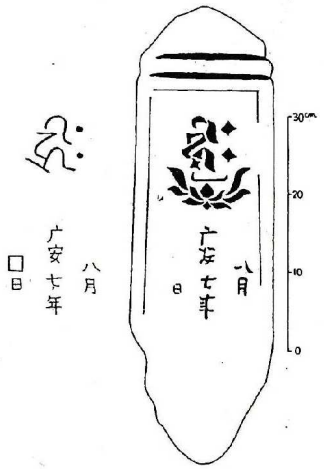
この板碑は現在所在不明である．「越谷市金石資料集」三十ページに記載されている図版によると、荘厳体で刻まれた主尊キリークと、それを載せた蓮華台が描かれている．蓮華台上部には花心がみられる．紀年銘の「延文」は北朝の年号である．紀年銘の両脇に一対の華瓶（仏前に花を供える時に使う入れ物．普通、金銅製の胴張りの壺で模様のないものが多い）がみられる．それぞれ三本の茎が描かれている．このように双式の華瓶の場合は三茎が一般的である．また、華瓶がともに徳利形に描かれているが、これは初期のものによくみられる．なお、花も初期のものは、きちんと蓮の花を描くものがある．のち、花や華瓶がかなり簡略に描かれるようになる．塔身部には回りに郭線がみられる．




※この図版は越谷市金石資料集三〇ページに載っているもの

## No.3　応安七年(1374)弥陀一尊種子板碑

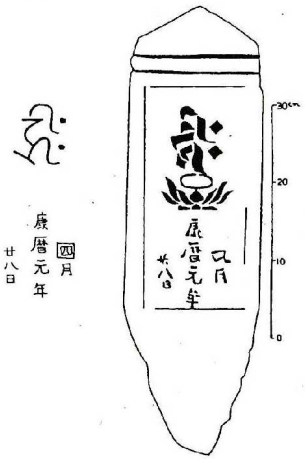
主尊・蓮華台ともV字形に深く彫る薬研彫で刻まれている．主尊キリークは荘厳体で書かれている．荘厳体は比較的初期に多くみられる．蓮華台の上部には花心が描かれているのがわかる．蓮華台の下の「応安」は北朝の年号である．その向かって右側には「八月」が刻まれているが、左側は日にちが刻まれていたと思われる．塔身部には回りに郭線がみられる．この板碑は西方番場の斉藤正雄氏の所有である．




## No.4　康暦元年(1379)弥陀一尊種子板碑

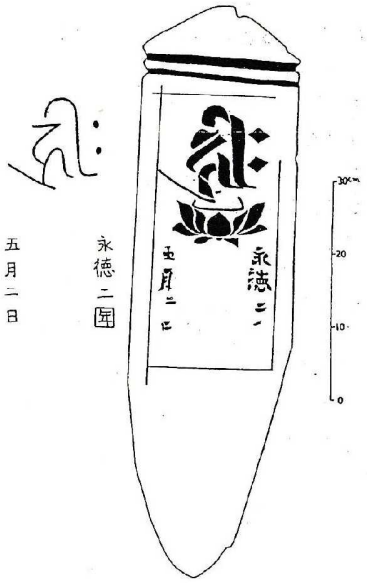
蓮華台に載った主尊のキリークは荘厳体で刻まれている．蓮華台の上部には花心が描かれている．紀年銘の「康暦」は北朝の年号である．塔身部には回りに郭線がみられる．

No.1，No.3，No.4 の三基の板碑は、西方の番場の斉藤材木店主斉藤正雄氏（相模町六丁目五六四の一）所有のもので、昭和六十二年二月頃に大聖寺に保管される．これら三基の板碑の発見のいきさつは、大聖寺所有だった杉のはえていた護摩木山と称する地（相模町六丁目四九四あたり．もと金剛寺の山林か？）を昭和三十五・六年頃に開墾した時に出土したものである．現在の護摩木山の地は宅地となっていてその名残りは全くない．



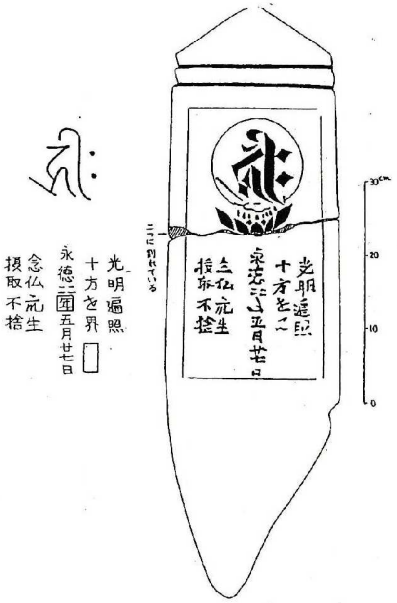
## No.5　永徳二年(1382)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークや蓮華台は蓑研彫で刻まれている．蓮華台の上部には花心も描かれている．紀年銘の「永徳」は北朝の年号である．永徳二年は南朝の年号では弘和二年にあたる．銘文の刻まれる中央には、永徳二年五月二日に逆修供養（生前に自分の死後の冥福を祈る）をした人の法名が縦に書かれていたと思われる．



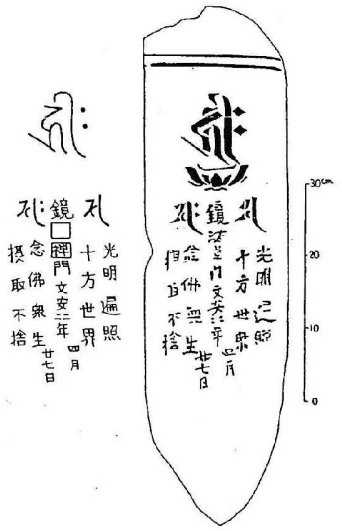

## No.6　永徳四年(1384)弥陀一尊種子板碑

主尊と銘文との間で真っ二つに割れているのが残念である．主尊側をみると、花心も描かれている蓮華台の上に主尊キリークが刻まれ、しかも主尊の回りに月輪と呼ばれる円がとりまいている．銘文側は、「永徳二年五月廿七日」と刻まれた紀年銘が中央にあり、その両脇には
光明遍照　十方世界　念仏衆生　摂取不捨
という偈文（経典にある詩文で、仏を讃えたり、仏法の真髄を述べたりしたもの）が刻まれている．大意は「阿弥陀如来の光明は遍く　十方世界を照らし　念仏を唱える人々を　摂取して捨てたまわず」この偈は観無量寿経からとった経文で弥陀板碑にしかみられない．この板碑の塔身部には回りに郭線がみられる．



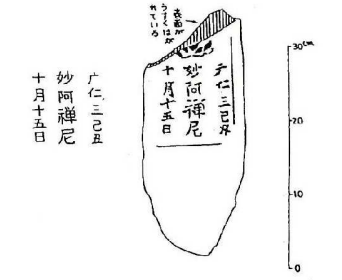

## No.7　文安四年(1447)弥陀三尊種子板碑

花心も描かれている蓮華台の上に載る主尊キリーク（キリーク・弥陀）の他、その左右下に脇侍（主尊の左右に侍しているもの）であるサ（サ・観音）とサク（サク・勢至）のあわせて三尊が刻まれている．銘文が書かれている中央には男性の法名とその下に年号・月日が、また左右には観無量寿経の偈文が刻まれている．この偈文については No.6 の解説文を参照のこと．法名の中の位号である「禅門」（男性）、「禅尼」（女性）は板碑によくみうけられる．鏡圀禅門が文安四年四月二十七日に逆修供養したものであろう．




## No.8　応仁三年(1469)一尊板碑

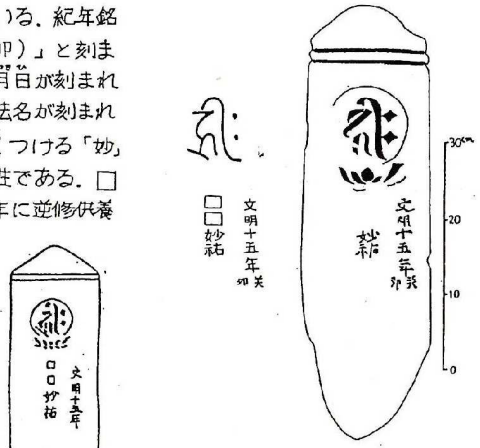
上部が欠落していて主尊は不明．描かれている蓮華台の位置により、一尊板碑であることがわかる．また、郭線がみられる．中央に刻まれている法名は、位号が禅尼であるから女性である．位号をみなくても法名の中に「妙」の字があれば女性の法名であるとわかる．また、法名の中に阿号（南無阿弥陀仏の「阿」をさす）がみられるので時宗板碑の可能性が充分ある．すると、時宗を信仰する女性信者が応仁三年己丑歳の十月十五日に逆修供養したものであろう．



## No.9　文明十五年(1483)弥陀一尊種子板碑

蓮華台の上に主尊キリークが載っている．主尊の回りは月輪で囲まれている．紀年銘は「文明十五年癸（癸）卯（卯）」と刻まれている．向かって左端には月日が刻まれていたのであろう．中央には法名が刻まれている．法名の中に女性がよくつける「妙」の字があるのでこの法名は女性である．□□妙祐という女性が文明十五年に逆修供養したものであろう．

※「越谷市金石資料集」の五十ページには右の図版が載っているが、紀年銘の中で「癸卯」の干支が記載されていない．







## No.10　文明年間弥陀三尊種子板碑

蓮華台の上に載る主尊キリーク（弥陀）と、その脇侍サ（観音）・サク（勢至）がそれぞれ回りを月輪に囲まれている．右図は「越谷市金石資料集」の五十一ページに載っている図版である．今（昭和６３年９月）の板碑はかなりいたんでおり、向かって右の側面から下にかけて表面がうすくはがれ、文字が消失している．しかし、この金石資料集の図版によって法名が道仲妙□と呼ばれる女性が文明年間の四月二日に逆修供養したのであろうことがわかる．







## No.11　明応八年(1499)弥陀三尊種子板碑

主尊のキリークと脇侍のサ・サクの種子はそれぞれ月輪に囲まれ、蓮華台に載っている．三尊の上には天蓋（仏さまを覆う日傘のようなもの）があり、その天蓋の両端から飾りが垂れ下がっている．塔身部の左右の側には縦に光明真言と呼ばれる真言（密教で唱える呪文で梵字で表わす）が刻まれている．




「金石資料集」のP53の図版によると銘文は明応八年己未十月十二日鏡願禅門となっている

オン ファ ボ ロ シャ ナ マカ ボダ ラ マニ ハン ドマ ジン ダマ ニ ハラ ハラ ハラ ケン ソワカ

大意は

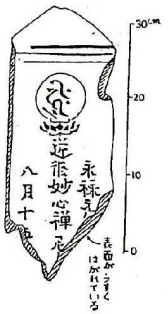
霊験空しからざる遍照如来（大日如来）に帰命し奉る．大印ある者よ宝珠と蓮華と光明の徳を有する者よ、転迷開悟せしめ給え．ウン．

また、銘文をみると法名が鏡願禅門という男性が明応八年己未歳の十月十二日に逆修供養したのであろうとわかる．

## No.12　永禄元年(1558)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークを月輪で囲み、その下には蓮華台が刻まれている．この板碑は後期のものであるから、種子の彫りが初期のようにV字形に深く彫る薬研彫ではなく、浅い彫りとなっている．力弱い彫りではある．銘文を読むと、法名が妙心禅尼という女性が永禄元年八月十五日に逆修供養したことがわかる．

さて、この板碑の最大の特色は、彫られた主尊や蓮華台・銘文に埋め込まれた金が四百年以上も落ちずに残っていることである．このことは大変めずらしい．当時は彫ったあと、表面に何が刻まれているのか一目でわかるように金などを埋め込んだのであろうが、その名残りをこの板碑にみることができる．この板碑を発見したいきさつは大聖寺本堂裏手の一部を畑にしようと堀り起こした所、昭和６２年２月頃に偶然にみつかったものである．板碑の表面を伏せられた状態で掘り出されたためか金が今日まで落ちずに残ったのであろう．当時の名残をよく残している貴重な板碑といえる．



# 大相模地区の　新編武蔵風土記稿」

加藤幸一

雄山閣発行の　新編武蔵風土記稿」をもとに作成した。
（）内の文字及び※の文章は、加藤が加筆した。

## ○西方村　附　持添新田

※八条領に属する。

※持添新田とは、　反高はあるが新田村居の農民が不在の土地」

秋葉一男氏『見沼の歴史』の見解より）

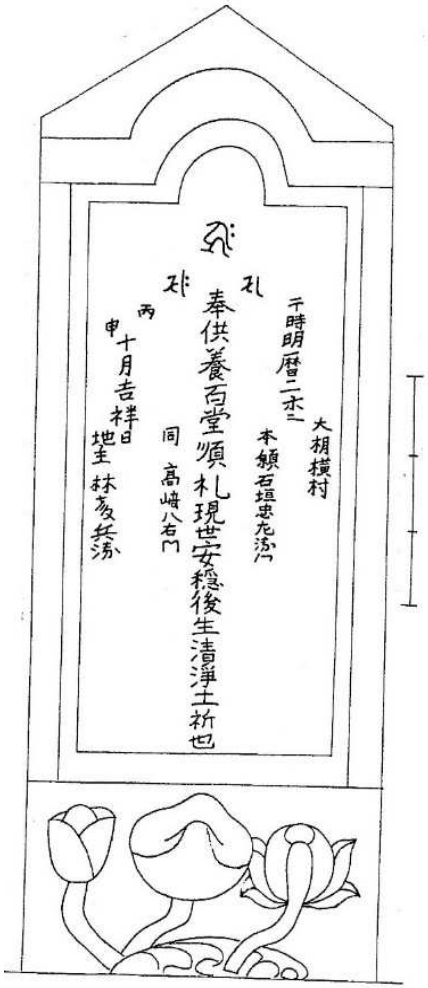
西方村は大相模郷に属す、古へは、東方・見田方・当村　西方）を合て大相模郷と云ひしが、其後、分郷のとき、当所は其郷中の西に当れるをもて、かく名付くと、村内大聖寺不動の来由に、此郷の名義をの　載）す、且当国　武蔵国）七党野与の系族八条・金重・渋江氏の人多く此辺につどひ、今も村名に　これらの名前が付けられて）のこれり、されば其系図にのせたる、大相模能高及び能忠などいへるは、当所に住し、在名　住んでいる地名）を称せしこと知るべし、かたがた以旧地　昔からの古い地名）なることは論ずるに及ばず、江戸よりの行程五里余、民家百六十、東は東方村、西は瓦曽根村、南は登戸村、北は小林村に接せり、日光街道、村の西界を貫り、東西十五町、南北十八町許、家康の）御入国　天正十八年、一五九〇年）以来御料所なりしを、寛文十一年　一六七一）村内を裂て萬年佐左衛門に賜はり、残りし所を延宝七年　一六七九）、堀田筑前守に賜ひしが、元禄十一年　一六九八）又御料所に復せり、よりて今、御料と　萬年）佐左衛門が知行なり、検地は寛永四年　一六二七）興津角左衛門、鈴木藤兵衛糺せり　改め直す）、外に、享保十六年　一七三一）・同　享保）十八年の二度、伊奈半左衛門、寛延二年　一七四九）吉田源之助、明和七年　一七七〇）遠藤兵右衛門が検地せし新田あり、当村の持添なり、

※中世の大相模郷とは、西方　由野地区を除く）、見田方　飯島地区を除く）、東方の地域をさすのである。

※大相模二郎能高　ましたか）の子孫が、能高以降現在地に住み続けている大成町二の三三一の一の二十七代当主中村顕司　えいし）宅である。享保十五年　一七三〇）に大相模姓を中村と改称している。

※中世の大相模郷　現在の西方、東方、見田方の地域）が江戸時代になって西方村、東方村、見田方村の三村に分村したと読み取れる。

東方の観音寺に　大相模村」の文字が刻まれている歴史解明に貴重な石塔がある。




明暦２（１６５６）




13・板碑型百堂巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　東方・観音寺
石塔型式　板碑型（東向き・高さは中）
年　号　明暦二年（一六五六）
［正面］

大相模村　（三段にわたり、
于時明暦二□（季カ）
本願石垣忠左衛門　五十余の
（梵字サ）奉供養百堂巡礼現世安穏後生清浄土祈也
（梵字キ）　同　高崎八右門　人名が
丙
申十月吉祥日　刻まれ
地主林彦兵衛　ている）

この石塔に　大相模村」の文字が読み取れる。このことから言えることは、大相模郷が江戸時代の徳川家の政権になって、まずこの地域に大相模村が誕生、その後、分村して西方村、東方村、見田方村の三つの村にわかれたと推測することができる。大相模村は明暦二年以前に既に誕生したと思われるが、大相模村の正確な誕生や分村の時期については、この石塔からはわからない。今後の課題である。

※万年氏は、西方村内に知行地を持つ旗本である。

※ここでいう　伊奈半左衛門」は、伊奈半左衛門忠順（ただのぶ）の跡を継いだ伊奈半左衛門忠達（ただみち）を指すのであろう。

高札場（こうさつば）　村の中程にあり、

小名（こな）三谷（さんや）　由野）組　藤塚（ふじつか）組　田向（たむかい）組　西方（にしかた）組　松土手（まつどて）

※松土手は葛西用水の取水口の北の川の中の中洲に松玖（まついり）をともなってあった。

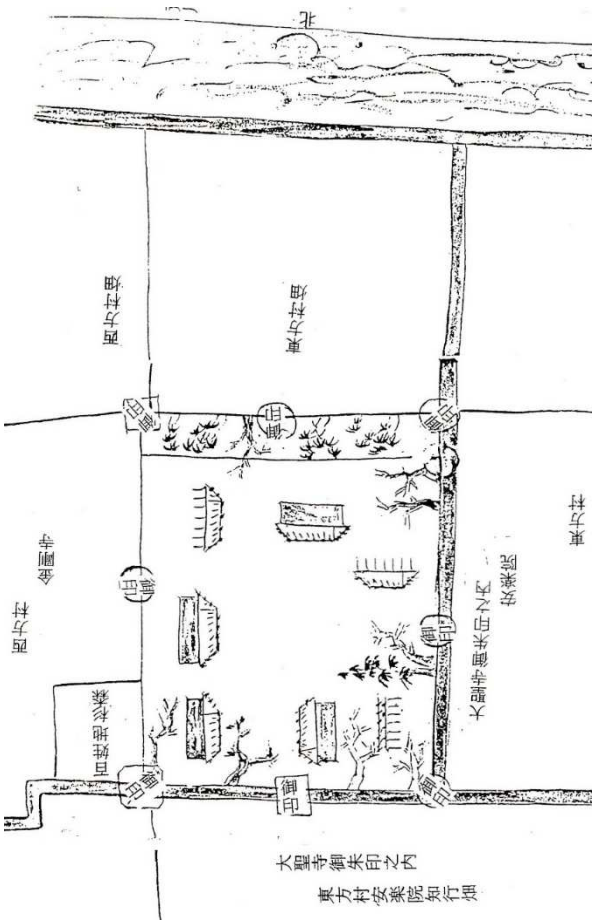
元荒川（もとあらかわ）　西（かた）の方を流る、隣村（となりむらかわらそねむらためいけ）瓦曽根村溜井の続きにて、則（すなわち）こゝに石堰（いしぜき）を設（もう）く、是（これ）は延宝（えんぽう）六年（一六七八）公（おおやけ）よ

り築立られ、八条・淵江・越ヶ谷・新方・岩槻・谷古田・西葛西七ヶ領の預る所なり、又此溜井に設くる圦十六ヶ所、夫より引分つ、用水・悪水合て二十一ヶ所、其各渠に架する橋五十三ヶ所あり、この川に河岸場あり、安永元年（一七七二）願ひ上て河岸場となせり、当村此水元ゆへ久霖暴雨の時は、第一に水災を被れど、組合の輩は己が村々の事のみに奔走し来りて、力を助くる者なく、又旱魃の時は領中より交る交る来りて水の分量をなし調節し、其村々へ引漑ぐゆへ、聊か他村より多く引用ゆることあたはず、誠に近郷比ひ比、みな同じ状態にあるさま）まれなる難渋の村なり、よりて常に明俵（申身が空になった俵）一万余、縄三千房をたくはへ、其備へとなす、享保十一年（一七二六）、公へ願上、小屋を結び、定杭をたて、事ある時は役人来りて村民を指摩（指図」の意味か）し、其難を救はしむと云、尚瓦曽根村溜井の条あはせ見るべきなり、

※延宝六年（一六七八）の石堰（瓦曽根堰）は、本間清利氏によると寛文四年（一六六四）にできたと推定している。現在のしらこばと橋の真下あたりにあったが、大正年間の赤水門の建設により赤水門の少し下流にあった石堰は撤去され、しらこばと橋が建設されるまではその石堰の基礎部分の残骸が取り残されていた。現在のしらこばと橋の建設がきっかけとなって、その貴重な基礎部分の石もあとかたもなく処分され、石堰の名残となるものは現在全くない。

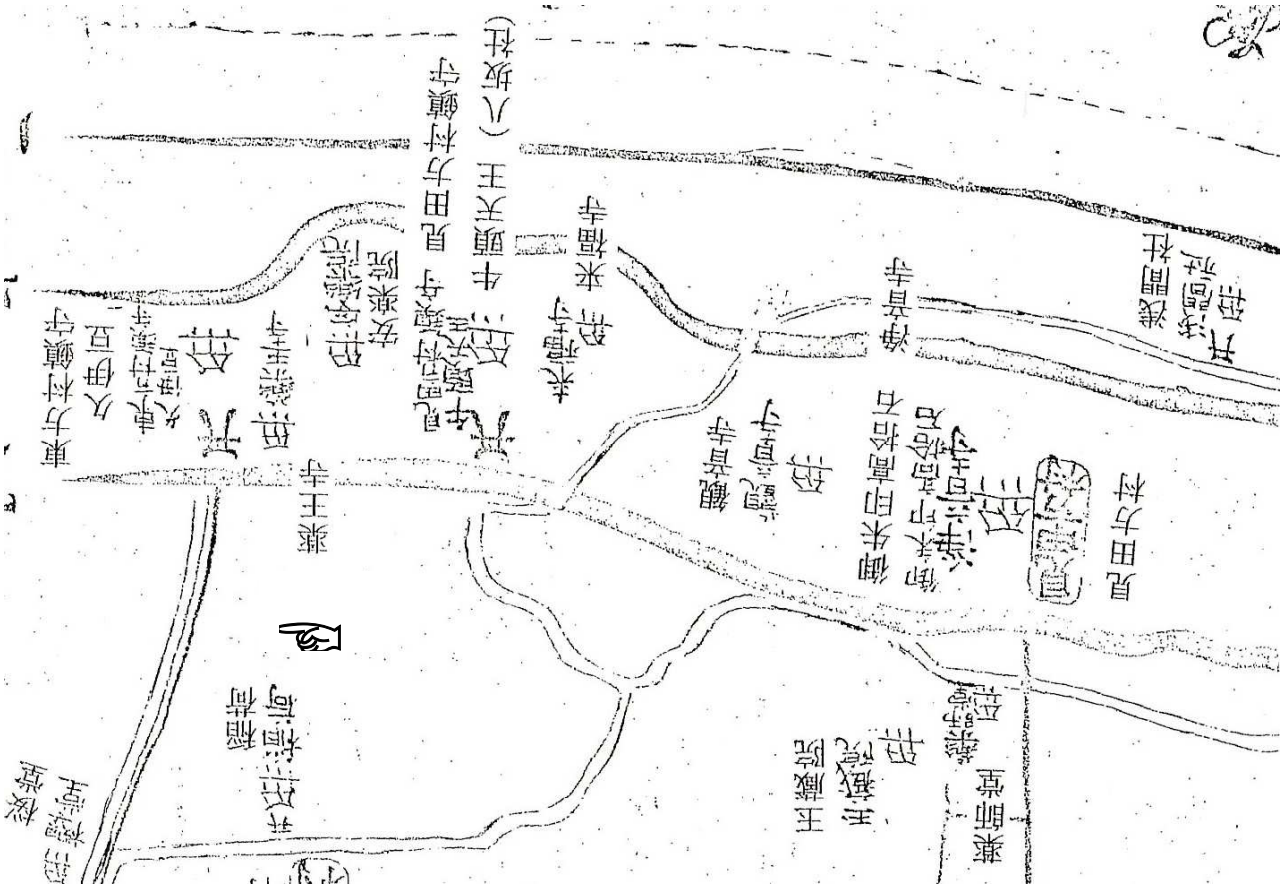
山王社　村の鎮守なり、別当東光院本山修験、葛飾郡幸手不動院の配下なり、当社元大社にて六佚（六人の世捨て人」という意味か）の僧ありしと云　山王社は配下に六ヶ寺を有していた)、東光院は即其一にて、余の五寺は利生院・神王院・安楽寺（安楽院」の誤り）・薬王寺・観音寺是なり、利生院は今大聖寺の塔頭　大寺院の境内にある小寺院、大寺院に所属し脇寺ともいう）にて、神王院は廃し、其余の三寺　安楽院・薬王寺・観音寺）は東方村にこれあり、

※　安楽寺」薬王寺」は、東方村の項では　安楽院」薬王院」と異なって記載されている。安楽寺」は　越谷市史・続資料編（三）の一四七頁の古絵図では　安楽院」（傍）となっているので安楽院が正しい。解読　加藤幸一）


北
西方村
東方村畑
西方村畑
金剛寺
百姓地屋敷
大聖寺御朱印之内
安楽院
東方村
御田
御田
御田

さらに次の古絵図によって「薬王院」ではなく「薬王寺」（☜）が正しいことがわかる。

越谷市立図書館所蔵の絵図２５の２　越谷市内の大成町周辺の絵図その２」




解読　加藤幸一

また、越谷市史三　史料　二」の八八　二頁の下段には、「安楽院」　薬王寺」との記載がみられる。

以上から、「安楽院」　薬王寺」と呼ばれていたことがわかり、安楽寺、薬王院は誤りである。

※東光院は山王社　現・日枝神社）の別当寺で、山王社の東隣　一帯の空地あたりにあった。利生院は現在の十一面観音堂、その裏の北側　一帯には安養院があった。神王院は山王社の西側　一帯にあった。　一方、東方の安楽院は東方村の鎮守　・久伊豆社の東方百　mあたり、薬王寺は東方の南馬場　ばば）自治会館の西北西八十　mあたり、北北西五十　mには十王堂があったという。観音寺は大成町　一丁目の現在の観音寺である。

〇八幡社（はちまんしゃ）　東光院（とうこういん）の持（もち）、

不動堂　縁起の略に、往古、良弁僧正相州大山開闢の時、面（　地面」か）のあたり、不動の霊容を拝し、其尊像を刻まんとて、先其木の根本をもて一刀三礼し、一像を彫刻し、是を大山根本不動と名付く、大聖寺開山の僧　となる）不動坊といへる者、夢の告に任せ、彼像　（大山根本不動」の像）を負出て当所に来りけるが、俄に笈　修験者や行脚僧などが背中に負う入れ物で、四隅に脚がついて戸により開閉する箱）重くなりければ、是こそ有縁の地ならんとて、遂に当山に安置せり、よりて山を真大と号し、地を大相模と称し、且其不動坊又不動院といひ、僧俗　僧侶と俗人）の尊崇斜　世の常）ならず、天正十八年　（一五九〇）、東照宮　家康）御入国あり、大聖寺の住侶　住職）定伝といへるもの高徳たるにより、御帰依浅からず、同き　ママ　天正）十九年、寺領六十石を賜はり、慶長五年　（一六〇〇）下野小山御帰陣の砌、当地へ渡御　お出まし）あり、関ケ原御陣の御願を懸られ、御太刀を納させ賜ひしが、御利運　よいめぐりあわせ）の日に当り、著しき霊験ありければ、是より世の人弥崇敬し、毎年正・五・九月の三回ごと）には会式　法会）を興行すと見えたり、此余さまざまの事を書綴れど、妄誕根拠のない内容）に亘れば取らず　その他の様々な事をここでは採用しない）、本尊良弁の作は一尺七寸許の立像なる由、秘仏として人に示さず、前に智証　大師円珍）の刻める一尺三寸の立像を安ぜり　安置する）、

※不動堂は、現在の大聖寺の本堂より北側奥にあったと思われる。

※ここでの不動尊　不動坊）のいわれは他とは多少違っていて、良弁が相模国の大山で根元の木から　大山根本不動」の像を一体刻み、それを不動坊という僧侶が背負ってこの地にやって来ると不動明王像が急に重くなり、不動坊」とか　不動院」と称する不動堂を開山したとなっている。

仁王門　門外に寛保四年　（一七四四）の制札　立て札）を立り、

※阿吽の仁王像を両側に安置した現在の惣門

二天門　持国・毘沙門の二像を安ず　安置する）、

※不動堂　現在の本堂にあたる）と仁王門　現在の惣門）の間にあった門、明治二十二年十月九日の門前町内の山崎屋で出火し、周辺十七軒を焼き尽くすとともに、飛び火が二天門に移り焼失した。二天門のみの被害で済んだようだ。

なお明治二十八年七月には不動堂から出火し、仁王門を残してほぼ全焼した。

裏門　真大山の額をかゝ掲）ぐ、

※松平定信直筆と言われる　真大山」の額は現在は惣門に飾られている。

ここでは定信直筆について一切触れられていない。

※裏門は元荒川側にあった。明治から大正にかけて越ヶ谷駅　現・北越谷駅）から吉川行の乗合馬車が運行していた　後に乗合自動車も競合）が、裏門がその停留所であった。そばには不動の渡しがあった。

経堂

鐘楼　明和三年（一七六六）鋳造の鐘をか懸）く、

東照宮御宮　昔は御太刀を御神体とせしが、延宝六年（一六七八）御木像を安置し奉ると云、其時、記せしものあり、左の如、

奉建立

東照権現宮　一宇

東照権現御在世日、寄高駕於大聖密寺、寺領六十石御寄附、是其由緒也、

依之小僧晨夕欲奉安置尊容、無衣鉢之可捨因循、至于今幸予領御祈祷所、

且今年征夷大将軍右大臣源家綱公、有御子孫繁昌之御願、以為奉令終御願如左、

延宝六戊午年六月十七日

願主

知足院第十五世法印尊如

別当

大聖寺第九世法印　観如

天神社

愛宕社

弁天社

秋葉社

太子堂

地蔵堂

※現在の大聖寺の北西隣の「地蔵堂」墓地をさすのであろう。

別当大聖寺　新義真言宗、京都醍醐三宝院の末、真大山と号す、開山僧不動坊、中興開基定伝、後、柿木村東漸院に隠棲せりと、共に寂年をつたへず、

※大聖寺は、不動堂の別当寺である。

什宝

御太刀一　前の縁起にいへる御太刀なりと云、長一尺八寸五分、白鞘なり、　※慶長5年（一六〇〇）、家康が小山から関ヶ原に向かう途中に大聖寺に立ち寄り、戦勝祈願をしたときに使った太刀。長さ五十六㎝という。

唐頭（獅子頭」のことか）　一　村民某納めし所なれども、其来由詳ならず、

塔頭

利生院　本尊十一面観音を安ず　安置する)、

※現在の相模町六丁目の十一面観音堂あたりにあった。

道照庵　今廃す、

○安養院　大悲山と号す、本尊大日なり、

天神社　三峯社

※安養院は、西方の十一面観音堂の裏側北方の地の一帯にあった。

安養院住職が祈祷寺の大聖寺に代って葬儀などを執り行ったと伝わる。

※　同断　真言宗）同断　西方村）本尊大日如来、開山不知、山号大悲山、境内天神社・三ツ峯社御座候、」（越谷市史三　史料一」　一六三頁より）

○福寿院　本尊阿弥陀、　稲荷社

※福寿院は、藤塚バス停の北方にある墓地あたりにあった。ここにある稲荷社の敷地はもとは日枝神社の所有する敷地だったという　秋山幸一氏談)。山号は「稲荷山」である。

※　真言宗西方村大聖寺末、本尊大日、開山不知、山号稲荷山、境内ニ稲荷社壱ヶ所」（越谷市史三　史料一」　一六三頁より）

○正福院　本尊薬師、以上の三寺は大聖寺の末なりと云、

※　同断　真言宗）同断　西方村）本尊薬師、開山不知、山号なし、境内社なし、」（越谷市史三　史料一」　一六三頁より）

○知性院　大聖寺の門徒なり、本尊は阿弥陀、　八幡社

※知性院は日枝神社の西方にある相模町六ー四六三の石垣家は屋号が「知性院」とか八幡様」と呼ばれた。この地に知性院があったのであろう。現在、その知性院の八幡社と金毘羅社が今日まで大事に引き継がれている。特に八幡社は毎月一日と十五日に地元の人々より日枝神社のお参り後にここに立ち寄ったという。その後は金子家のおしゃもじ様　現在はない)、最後に不動尊との参詣が見られた。

※　同断　真言宗）同断　西方村）本尊阿弥陀、同断　開山不知)、山号なし、境内八幡社・金比羅社御座候、」（越谷市史三　史料一」　一六三頁より）

○金剛寺　同宗　新義真言宗)、瓦曽根村照蓮院末、本尊大日なり、　稲荷社

※相模町六―四九四の岸野家の南西角地にある地蔵堂の北側一帯にあった現地の聞き取り調査)。

※ 真言宗瓦曽根照蓮院末、本尊大日、開山不知、山号無し、境内稲荷社御座候、」

(越谷市史三　史料一　一六三頁より)

○大徳寺　同宗　新義真言宗)、末田村金剛院門徒、本尊は阿弥陀、

※相模一丁目一九一の丸喜酒店の北西の墓地あたりにあった。

※ 真言宗岩槻領末田村金剛寺(院」の誤)末、本尊阿弥太、開山不知候、山号宝樹山、境内稲荷社壱ヶ所」(越谷市史三　史料一　一六二頁より)

○不動堂　大聖寺の持、

※江戸時代の不動堂は、現在の大聖寺本堂(不動堂)より少し北側奥にあった。

○閻魔堂　村民の持、下二堂(観音堂、勢至堂)同じ、

※西方山野の閻魔堂は、八条用水に架かる閻魔堂橋の南東にある。

○観音堂

※西方番場の観音堂は、相模町六丁目の番場自治会館あたりにある。

斎藤　五郎兵衛屋敷」内にあって、個人持ちである。

○勢至堂

附持添新田

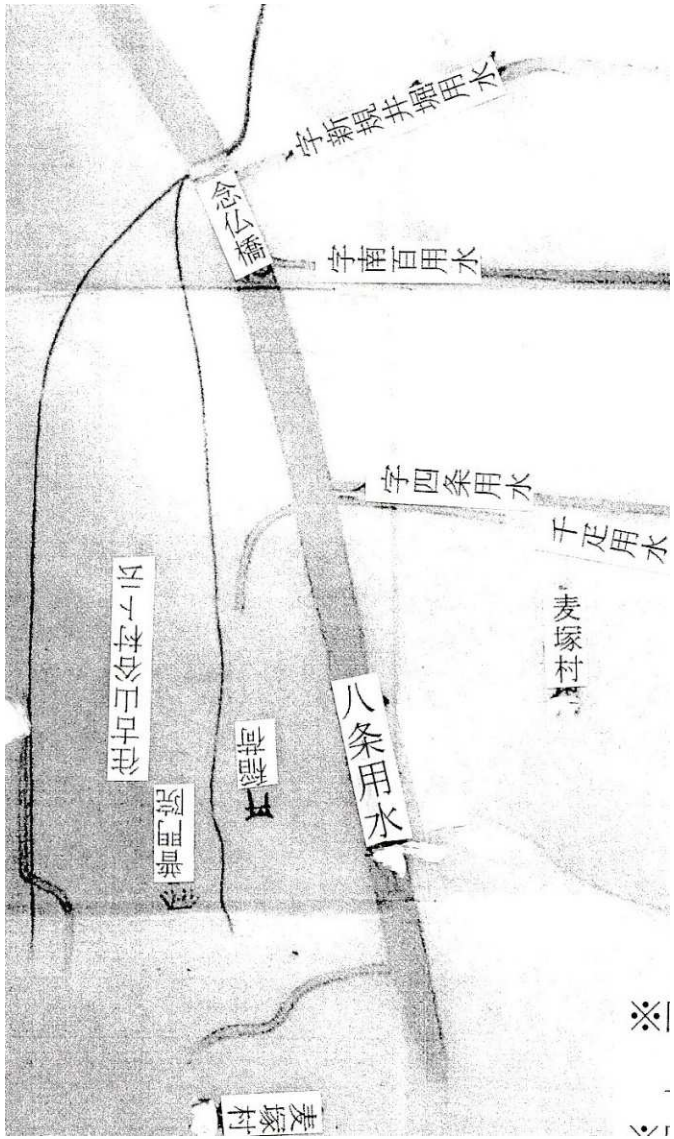
※八条領に属する。

## ○東方村

東方村は、郷名及び用水、江戸の行程等、前村(西方村)に同じ、古は当村及び西方・見田方三村合て大相模郷と云、其内、当村は東の方にあるをもて、かく名付、と云事は西方村に弁ず(西方村で)西に当れる」と説明したことと同じの趣旨)、民家八十五、南は麦塚村、西は西方村、東は見田方村、北は元荒川を限り、対岸は)増林村なり、東西七町、南北二十五町、細長き村なり、正保の頃(一六四四～四七)は小野久内知行にて、後、設楽勘左衛門にか(替)へ賜ひ、又元禄十一年(一六九八)阿部豊後守に賜はり、今子孫(阿部)鉄丸が領分なり、慶長十七年(一六一二)検地あり、後寛永四年(一六二七)新井十兵衛・成瀬権左衛門等糺せり(改め直す)、外に明和三年(一七六六)辻源五郎が検(検地)せし持添の新田あり、こゝは御代官所なり、

高札場　西の方にあり、

小名　山谷村　元禄国図には、東方村の内山谷村と書し、別に載せたれど、今は全く小名にて、別に一区をなせしものにはあらず、



八条領西袋村小沢家文書「東方村・見田方村絵図」

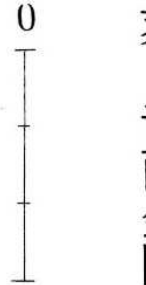
※現在の川柳地区にある「上谷」の地域がかつての山谷村である。前頁の図中の「普門院」は、現在の上谷墓地そばにあった寺院。上谷墓地北隣の道路を隔てた北側の駐車場の地である。また、図中の普門院そばの「稲荷」社は、上谷の鎮守である。江戸時代の山谷村（現・上谷）は東方村に属していたのである。

※次の石仏は上谷の稲荷社に置かれている。向かって右下に「山谷村」と刻まれていることから、この地が「山谷」と呼ばれていたことを裏付ける貴重な石仏である。

## 塞神改刻・青面金剛像庚申塔

稲荷神社






元禄8（1695）、改刻（明治初年頃か）

元荒川　北の方を流る、川幅二十五間ばかり、

久伊豆社　村の鎮守、安楽院の持、　末社　稲荷　天神

○浅間社　村民の持、下三社　神明社・稲荷社二宇）同じ、

※東埼玉道路の東方、大成町八丁目の東西の土手道から元荒川水管橋に向けて下っている道路の五十メートル先西側沿いにあった　現地の聞き取り調査）。

○神明社　末社　稲荷　疱瘡神

○稲荷社二宇

## 安楽院

新義真言宗、西方村大聖寺末、山号本寺に同じ　（真大山）と云、所以を知らず、下の二寺　薬王院・観音寺）同じ　山号　真大山）、本尊は阿弥陀なり、

※東方村の南馬場自治会館より北方八十メートル先に安楽院の墓地の名残がある。安楽院の本堂は、それより北西五十ｍ先にあった。

○薬王院　（薬王寺」の誤り）　同　大聖寺）末、本尊薬師、

※南馬場自治会館　現・薬師堂」）より西北西百ｍ先にあった。その南側一帯が境内地であろう。

○観音寺　同　大聖寺）末、本尊観音、

※大相模小学校入口バス停の北方にある観音寺。

○玉蔵院　是も同　大聖寺）末にて開玉山弥陀寺と云、本尊は阿弥陀、

※大相模小学校入口バス停の南方にある墓地が跡地である。

○普門院　同宗　新義真言宗）、柿木村東漸寺末、光明山不動坊蓮華寺と称す、

本尊不動、

※現在の上谷墓地あたりにあった。

○阿弥陀堂　村民の持、下　地蔵堂）同じ、

○地蔵堂

※大相模小学校の南西の隣にある　地蔵堂」墓地あたりであろう。

○十王堂　安楽院の持、

※南馬場自治会館前の墓地は、十王堂の墓地跡である。十王堂の本堂は、ここより北北西五十五ｍ

先にあった十王堂の集会所（現在空地）の地であろう。

○阿弥陀堂　玉蔵院の持、

## ○見田方村

※八条領に属する。

見田方村は古当村及び西方・東方三村合て大相模郷と唱ふ、因て今も此郷名を被ると云事は西方村に弁ず、

江戸よりの行程六里、民家五十九、東は南百村、西は東方村、南は麦塚村、北は元荒川を隔てゝ増森村に界へり、

東西七町、南北九町余、当所も阿部鉄丸が領分にて、寛永四年（一六二七）稲生清兵衛・小河加右衛門検地せり、

※「小河」の読みは「おがわ」か「おごう」か。

高札場　南の方によりてあり、

元荒川　北の方を流る、当領（八条領）と新方領の界なり、幅は二十五間許、川にそひて堤あり、

天王社　村の鎮守なり、来福寺の持、　末社　稲荷　天神

※現在、地元では「八坂神社」と呼んでいる。

浄音寺　浄土宗、京都智恩院末、解脱山保鏡院と称す、元は西方山蓮華院浄香寺と云、天正十九年（一五九一）より寺領十石を賜ふ、開山解脱阿存保、文禄三年（一五九四）十月十五日示寂、開基は宇田長左衛門と云、法諡（諡）卒年　死亡年）を失ふ、されど伝燈総系譜、存保は、武州足立郡人姓宇田氏、浄音寺開山たるよしを　伝燈総系譜に）の　載）す、因て思ふに長左衛門は、存保の一族にて、力を合せ当寺を建立せしなるべし、又、名主圭蔵も宇田氏なれば、是等の子孫なるべけれど、其　詳　なることを伝へず、本尊は阿弥陀を安ぜり　安置する）、

※浄音寺の開山　天正年間か）は宇田存保で、開基は宇田長左衛門、共に宇田一族であろうとのこと。宇田家は忍藩柿ノ木領八ヶ村の割役　わりやく）名主を勤めた家柄で、現在の大相模小学校の正門北側、道路を隔てた所の西側寄りに長屋門があった。

鐘楼　近年の鋳造なり、

八幡社

○東陽寺（東福寺）の誤りか）　前寺（浄音寺）の末、本尊阿弥陀、

※見田方飯島の東福寺」の誤りか。東福寺は、現在の吉川県道の大成町交差点の南東角にある東福会館あたりである。

○来福寺　新義真言宗、末田村金剛院門徒、雷電山と号す、本尊虚空蔵なり、

※八坂神社の北東にある墓地あたりが来福寺の跡地である　現地の聞き取り）。

○薬師堂　村民の持、下　観音堂）同じ、

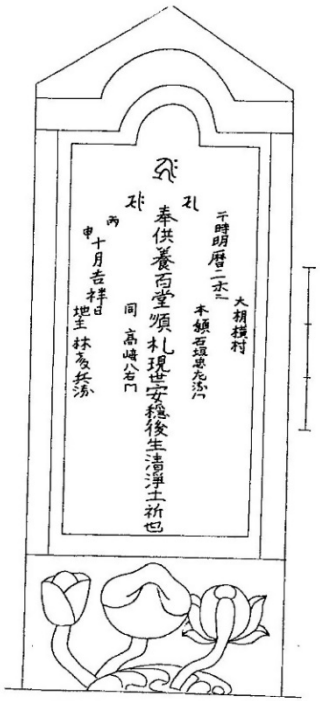
○観音堂

※大相模交番の西方、吉川県道沿いの斉藤商店自動車整備工場の道路反対側から奥に入った所にある。ここが観音堂の地であろう。

**資料**　江戸初期の　大相模村」の存在をしめす唯一の石塔　この石塔は墓地整理時に所在不明となる）

# 板碑型百堂巡礼塔

観音寺



明暦２（１６５６）

大相模村
干時明暦二永二
本願百垣忠左衛門
奉供養百堂順礼現世安穏後生清浄土祈也
同　高崎八右門
丙申十月吉祥日
地主　林多兵衛

※東方の真大山観音寺の無縁仏の墓所に、明暦二年（一六五六）の「百堂巡礼塔」がある。ここに「大相模村」の村名が見られ、大相模郷の歴史解明を裏付けするにあたって貴重な石塔といえる。この石塔を造立した明暦年間には既に大相模村が、西方、東方、見田方の三村に分村していたと思われるが、以前からの習慣で「大相模村」と刻んだのであろう。

※西方・東方・見田方の地域は、かつては大相模郷と呼んでいた。後に、西方村、東方村、見田方村の三村に分村した（「新編武蔵風土記稿」）という。江戸初期には、大相模村が既に三村に分村していたと思われる（正保改定図）。ただし、見田方村のうち飯島地区は、もとは飯島村と称し、後に見田方村に属するようになった。

《中世の「大相模郷」→「大相模村」→三村に分村（西方、東方、見田方）》

※かつての大相模村（大相模郷）は、飯島地区を除く見田方村、山谷地区を除く西方村、それに東方村の地域を指していたという。

# 斎藤家（味噌屋）・十一面観音堂周辺と不動道

相模町７丁目

作成　加藤幸一



## 【元荒川と大聖寺・日枝神社周辺の寺社跡】

### 西方の日枝神社（江戸時代は山王社と称する）

現地の昭和６１年３月の埼玉県作成の案内板によると、「日枝神社の勧請年は不詳であるが、元荒川をひかえた奥州道（日枝神社の前の道）に面した古社の一つである。もとは山王社と称され、東光院、利生院、神王院、安楽寺（安楽院の誤り）、薬王寺、観音寺の六寺院を配下に納めていた大きな社であった。その後、江戸時代に四寺が大相模大聖寺に塔頭に移され一寺が廃寺となったが、山王社は西方村の鎮守に位置づけられた。」と紹介されている。文中のルビと（ ）内は加藤幸一が加筆した。文中の「四寺」は利生院、安楽院、薬王院、観音寺をさし、「一寺」は神王院をさす。

江戸時代、山王社を支えたと思われる神王院（山王社との関連から天台宗系の寺院か）が廃寺となると、神王院に代わって真言宗系の幸手不動院の配下の東光院が山王社の別当となったと思われる。




現在の石垣家（相模町六丁目４６３）の屋号は「知性院」とも呼ばれ、石垣家墓地には大聖寺と同じ真言宗僧侶の墓石があるので、大聖寺配下の知性院ゆかりの地だったと思われる。




### 大相模河畔砂丘

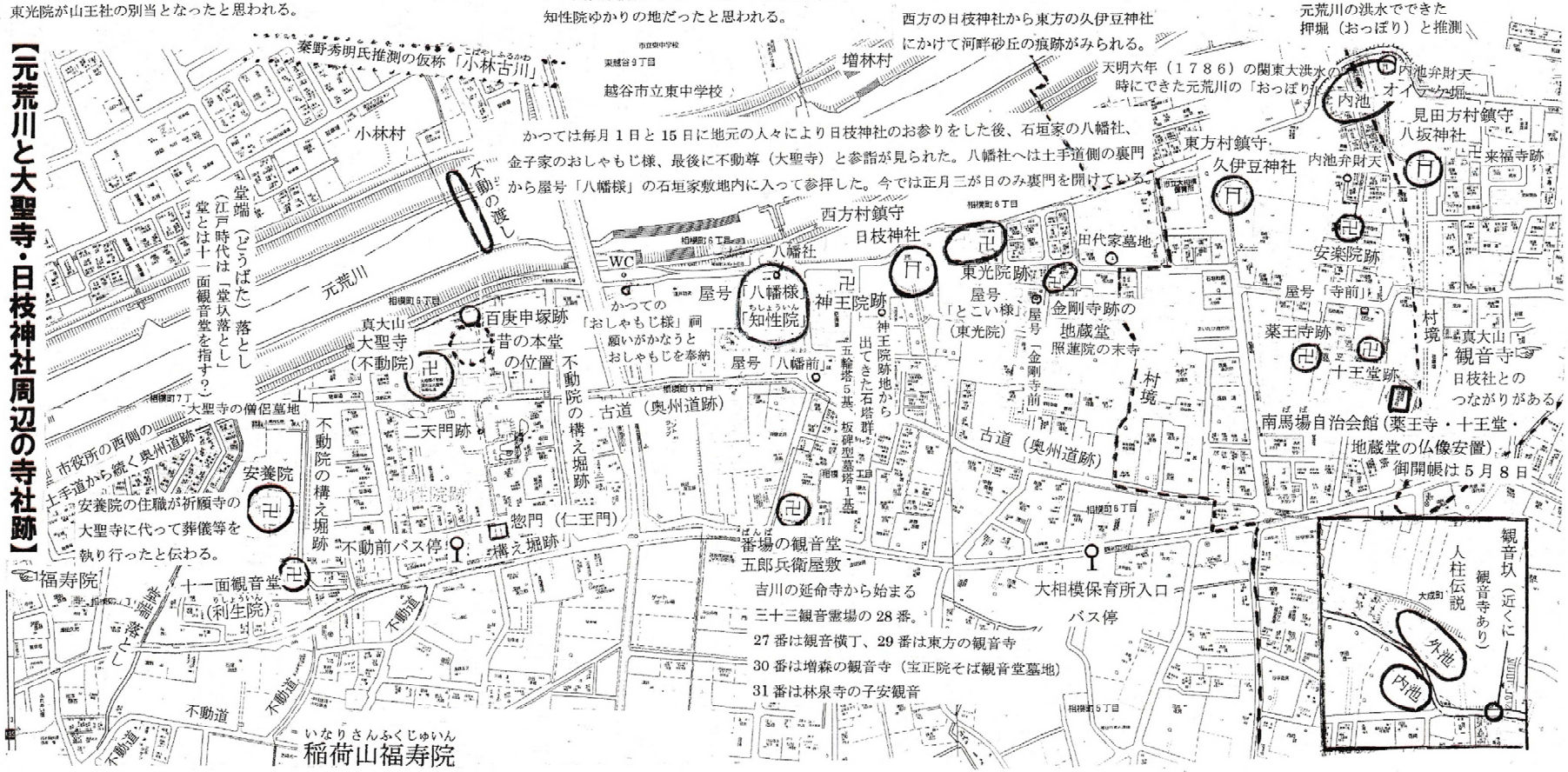
西方の日枝神社から東方の久伊豆神社にかけて河畔砂丘の痕跡がみられる。




大塚茂治家管理の内池弁天（夏ミカンの木あり）

### 「内池」

元荒川の洪水でできた押堀（おっぽり）と推測




かつては毎月１日と15日に地元の人々により日枝神社のお参りをした後、石垣家の八幡社、金子家のおしゃもじ様、最後に不動尊（大聖寺）と参詣が見られた。八幡社へは土手道側の裏門から屋号「八幡様」の石垣家敷地内に入って参拝した。今では正月二が日のみ裏門を開けている。

福寿院は大聖寺の末寺であるが、日枝神社とのつながりがあったようだ。日枝神社の秋山幸一氏によると、日枝神社参道沿いの社務所は、戦前、福寿院の建物を解体したものが一部使用しているという。
福寿院は、山号からもわかるようにかつては稲荷社が併設されていた。

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006年12月発行）使用

0　100m　200m　300m

平成３０年４月　加藤幸一作成

# 武蔵国三十三箇所観音霊場のご詠歌（原文）

作成　加藤幸一

第一番　吉川・延命寺
ふたうくや
きてうつなみの
よるかわも
なちのおやまと
おなじひびきぞ

第二番　平沼・智勝院
このてうの
だいひのちかい
いやまして
ただひとつぬまに
のりのはなさく

第三番　関・普門院
ただねがい
だいひのふねの
いでるまに
のりおくれては
こころせきうむ

第四番　中井・東眼寺
いでるひも
いるひもここに
とうがんじ
なかいのみづに
ひかりかがやく

第五番　中島・万福寺
ういてみよ
ぼだいのたねの
まんぶくじ
いどとじょうどの
ここがなかじま

第六番　三輪野江・定勝寺
ただたのの
だいひのちかい
みつぐんいん
ぼさつのちかい
ありぬたかひさ

第七番　高久・密厳院
みなひとの
ねがいはここに
みつぐんいん
ぼさつのちかい
ありぬたかひさ

第八番　高富・観竜院
とねがわの
ながれにつづく
ううぜんいん
さくしうつなみに
のりのおとさく

第九番　中曽根・観音寺
のもやまも
だいひのあみに
ひかれまして
このなかぞねに
かかるじんれい

第十番　彦糸・実相院
たのもしや
しんにょのつきの
くもはれて
ういのやみじを
てらすじっそう

第十一番　彦富・兵左衛門
ちちははの
そだてあげたし
めぐみにそ
まどひこどもの
さかえひさしき

第十二番　彦成・西福寺
めぐりきて
このさとさとの
ここだまにわ
だいひのひかり
うつるひさなり

第十三番　番匠免・迎摂院
ひるとなく
よるにもひびく
ばんじょうめ
ゆめおどろかす
のりのつちおと

第十四番　戸ケ崎・常楽寺
あわれただ
だしじだいひの
ちかいにわ
もれてもすくう
とかざきのてら

第十五番　猿ケ又・遍照院
ちょっとの
よきにわしやくの
さるがまた
みちびきたまい
むつのちまたを

第十六番　飯塚・安福寺
われひとの
しょがんをここに
ゆうがをの
はなのうてなに
のりのいいづか

第十七番　大瀬・太郎左衛門
いくおくか
しゅじょうもさらぬ
ちかいにて
あしのふるさと
ここにあふせわ

第十八番　川崎・仁兵衛屋敷
いっそうの
ふねにだいひの
さをさして
あまねくてらす
のりのかわさき

第十九番　木曽根・普門寺
ごどうをば
かねてちかいの
くにならば
たといきでねに
ひかりなくとも

第二十番　鶴ケ曽根・宝幢寺
ちょかけて
かわうぬちかい
いまここに
めぐりてつるが
そねにこそつく

第二十一番　八条・清勝院
いちまうの
れんざにざすも
だいひにて
さてもひろさよ
はちじょうのゆか

第二十二番　大曽根・蓮台寺
めぐりきて
またこのさとに
おうそねや
だいじだいひの
ちかいなるらん

第二十三番　伊興・実相院
うまれきて
またこのさとに
わうしょうじ
だいひのちかい
いくうみにうく

第二十四番　蓮沼・普門寺
だいひにわ
にょらいぐせいの
ふねもまた
つれてのうくる
はすぬまの里

第二十五番　赤井・円通寺
ういんよう
むいんにまでも
ゑんつうじ
じひのあかいに
はしもうつれり

第二十六番　赤山・西福寺
しのめの
またはれもせぬ
そのうちに
だいひのひかり
うつるあかやま

第二十七番　越ケ谷・観音堂
きのはいい
だいひのゆめに
ちのやは
はなさくあくま
のそくこしがや

第二十八番　西方・五郎兵衛
あまつはう
だいひせっしゅの
くもはれて
ひかりかがやく
ここがにしかた

第二十九番　東方・観音寺
だいひにも
さいせだいいち
つつきつつ
ひがしかたたそ
ふだうくのさと

第三十番　増森・観音寺
いつきいの
しゅじょうさどの
だいひにて
ひびにあったに
ましもうのてら

第三十一番　増林・林泉寺
いきくれて
のでらのかねの
きこゆるわ
このしるかげが
ましばやしてら

第三十二番　岩平・観音寺
こうみようは
あるねくらす
ちかひにて
うつつにけうな
いやひらのてら

第三十三番　川藤・東泉寺
みずかみわ
いくよへぬらん
このながれ
だいひのをてを
すすぐかわふじ

# 武蔵国三十三箇所観音霊場の御詠歌

第一番［延命寺］
補陀落や
岸打つ波の
芦川（吉川）も
那智の御山と
同じ響きぞ

第二番［智勝院］
この寺の
大悲の誓い
いや増して
ただ平沼に
法の花咲く

第三番［普門院］
ただ願い
大悲の船の
出でる間に
乗り遅れては
心急き（関）らむ

第四番［東眼寺］
出でる日も
入る日もここに
東岸寺
中井の水に
光り輝く

第五番［万福寺］
植えて見よ
菩提の種の
万福寺
穢土と浄土の
ここが中島

第六番［定勝寺］
ただ頼め
大悲の誓い
定勝寺
身は野に捨てて（三観音）
浮かぶ世も有る

第七番［密厳院］
皆人の
願いはここに
密厳院
菩薩の誓い
有りぬ高久

第八番［観龍院］
利根川の
流れに続く
竜善院
岸打つ波に
法の音聞く

第九番［観音寺］
野も山も
大悲の網に
引かれ来て
この中曽根に
かかる巡礼

第十番［実相院］
頼もしや
真如の月の
雲晴れて
有為の闇路を
照らす実相

第十一番［延命寺］
父母の
育て上げにし
恵みにぞ
孫彦富の
栄え久しき

第十二番［西福寺］
巡り来て
この里々の
児玉には
大悲の光
移る彦成

第十三番［迎摂院］
昼となく
夜にも響く
番匠免
夢驚かす
法の槌音

第十四番［常楽寺］
哀れ只
大慈大悲の
誓いには
漏れても救う
戸ケ崎の寺

第十五番［遍照院］
一寸の
善きには尺の
猿ケ又
導き給い
六つの巻を

第十六番［安福寺］
我人の
諸願をここに
夕顔の（夕顔観音）
花のうてなに
法の飯塚

第十七番［延寿寺］
幾億か
衆生も去らぬ
誓いにて
芦の古里
ここに仰せは（大瀬）

第十八番［正覚院］
一艘の
船に大悲の
竿さして
遍く照らす
法の川崎

第十九番［普門寺］
御堂をば
かねて誓いの
国ならば
たとい木曽根に
光り無くとも

第二十番［宝幢寺］
千代かけて
変わらぬ誓い
今ここに
巡りて鶴が（鶴ケ）
曽根にこそ着く

第二十一番［観音堂］
一葉の
蓮座に座すも
大悲にて
さても広さよ
八丈（八条）の床

第二十二番［蓮台寺］
巡り来て
又この里に
大曽根や
大慈大悲の
誓いなるらん

第二十三番［実相院］
生まれ来て
又この里に
横沼寺（おぬまでら）※
大悲の誓い
威光（伊興）身に受く

第二十四番［普門寺］
大悲には
如来弘誓の
船もまた
連れて乗り来る
蓮沼の里

第二十五番［円通寺］
有縁より
無縁にまでも
縁通じ
慈悲の赤井に
星も移れり

第二十六番［西福寺］
東雲の
又晴れもせぬ
その内に
大悲の光
移る赤山

第二十七番［観音堂］
気の払い
大悲の弓に
知恵の矢は
離さで悪魔
除く越ケ谷

観音横丁の
観音堂

第二十八番［正覚院］
天つ原
大悲摂取の
雲晴れて
光り輝く
ここが西方

番場の観音堂

第二十九番［観音寺］
大悲にも
済世第一
突つきつつ
東方こそ
補陀落の里

東方の観音

第三十番［観音寺］
一切の
衆生済度の
大悲にて
日々に新たに
増森の寺

増森の観音堂
林泉寺の観音地
安観音

第三十一番［林泉寺］
行き暮れて
野寺の鐘の
聞こゆるは
この下影が
増林寺

第三十二番［観音寺］
光明は
遍く照らす
誓いにて
移りにけりな
岩平の寺

第三十三番［東泉寺］
水上は
幾世経ぬらん
この流れ
大悲の御手を
すすぐ川藤

※第十五番の「尺」は、一尺のことで、一寸の十倍であるとの意味が含まれる。

※第二十三番の実相院は、横沼寺（おぬまでら）の別当。また、「いこう」は威光の意という。（実相院ご住職より）

※伊興の実相院発行の「観音霊場巡拝のしおり」の中の御詠歌を漢字混じりで表した。

文責　NPO法人
越谷市郷土研究会
加藤幸一




大相模村全図」（越谷市相模町二丁目一九八番地の小澤家「大相模歴史資料館」の展示）をもとに加筆作成
村々の合併による「大相模村」の成立は明治二十二年。
平成三十年四月十八日　加藤幸一